魔道砲と紅蓮の姫君

鳥丸てとせ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔道砲と紅蓮の姫君

【Ｎコード】
Ｎ９５２０Ｍ

【作者名】
鳥丸てとせ

【あらすじ】
主人公の青年・霧原勇人。彼は自分の身に立て続けに起こった不幸に心を悩ませていた。
気を紛らわせるために来ていた公園の池を覗いたとき、水面に映った少女と目が合った彼は意識を失った。
彼が目覚めたとき、そこは自分がいた世界ではなかった。

そこは魔法の国・バーゼッタであると、紅蓮の姫君・リリィク・バーゼッタは言う。彼は信じようとはしなかったが、城に向かう途中でモンスターに襲われ、それによって信じるしかなくなってしまった。

城に着いた彼は、幼馴染であり同様にこの世界に召喚されていた『水間龍弥』と出会う。彼が言うには、彼らをこの召喚したのは『伽の守人』という人物であるという。

元の世界に帰るために、リリィクと共にその情報を集めていた勇人だったが、突如として大臣が『ストラー』と名乗る少年を連れてクーデターを起こす。

混乱の中リリィクを連れて逃げだした勇人は、剣の国・ガルマンドへの道中にある森の中へと身を隠したのだった。

プロローグ

その日は小春日和というよりは初夏のようで、何とも言い難い暑さだった。それはきっと天気予報を見なかった自分のせいだろう。気温に対して厚手の服を着てしまっているからだ。

今は春休み。数日後には授業が始まる。今年で大学四年生になるが、入学当初のようにやる気が燃え立っているわけではない。就職活動だってしなければならないし、卒業に必要な単位の取得や卒業論文だって書かなければならない。正直に言ってやる気は出ない。やることが多すぎるんだ。気分も萎える。気晴らしにてテレビでも見てみようか？

ベッドから降りてテレビのスイッチを入れ床に座ってみる。今日もくだらない番組が流れている。いや、くだらなくはないな。いつもなら嬉々として見入る内容のはずだった。

「世界の不思議を暴く！テレビの前のあなたたちが証人です！」

よくあるオカルト系の番組。毎週世界の不思議な、といっても大体がこじつけにしか思えない場所をピックアップしてそれっぽい意見を複数映像化して流すだけの他愛もない娯楽番組だ。くだらないが家族で小馬鹿にしながら見るにはうってつけの番組だ、と俺は思う。中には本気で信じている人もいるんだろうが、それはそれで個人の楽しみ方だから何も言うことはないな。

「今日からは世界最大の謎、『十字海溝』の謎に迫る特集です。」

どうやらテレビ局の方は本気らしい。十字海溝というのは文字通

り十字の海溝で、飛び飛びに円形を作るように並んだ島々が囲う海にそれはある。この世界の人にとっては知っていて当然ともいえる。むしろ知らない人のほうが珍しい、そんな場所だ。まあ、そろそろ番組の改編期だから最後に大きな特集、といったところだな。

「見てください、このきれいな十字型！」

悪いが今日は見る気になれない。だいたい自然の作り出したものに自分たちの常識が通じると思っているのが間違いだ。何よりもきれいな十字じゃない、明らかに海流で削られたみたいに見えるじゃないか。まあ、専門家じゃないからよくわからないが。そういったところも含めて笑える番組なんだが、今は見ているほど心に余裕がない。

「そもそもこの海溝はですね、もともと上に島があり、何らかの現象によって島ごと消え去ったと言われています。」

誰に言われているのか知らないが、こういうのを考える人ってのは本当にすごいと思う。大人しく小説家にでもなってればいいのに。

さて、心に余裕がないのはここ最近不幸な出来事が続いたからだ。父親の失踪に幼馴染の自殺、親友の豹変と心が落ち着く余裕なんてない。

最近、といっても半年前だが父親がいなくなった。自慢じゃないが我が家は特に金銭的の問題も無く、浮気だとかそんなのもないし、家族のいさかいもない理想的な家族だった。それなのにいきなりいなくなった。母親は何か知っているようだったが絶対に教えてくれなかった。

思えば不思議な父親だった。というか電波的な人だった。「自分は魔法が使える」だの、「風を操れる」だの、「別の世界から来た」だのと言っては幼かった俺をワクワクさせてくれた。俺が大きくなるにつれてそういうことは言わなくなってはいたが、それは少し寂しかった。何よりも自由奔放な人で、それと合わせて何かと規格外な人で、道端で会った良家のお嬢様だった母親にいきなり「結婚してください」とか言い放つとんでもない人で……。本当かどうかは知らないが二人してそれを「史上最大のロマンチックな出来事」と言っては結婚記念日のたびに話してくれたが、もうその話も聞けないな……

「我々が極秘に入手した古い文献によると、かつてここにあった島は……」

少しうるさいと思った。テレビの電源を切ってからベッドに寝っ転がり考え事を続ける。

二週間前に幼馴染が自殺した。いや、自殺とは言えないかもしれない。警察の見解によると自殺ということだ。俺はそうとは思っていない。彼女から最後に届いたメール、それは『わたしたちはみられてる』というものだった。かなり焦っていたのだろうか、平仮名のまま変換されていなかった。

俺は、すぐにもう一人の幼馴染であり彼女の恋人でもあった『水間龍弥』に連絡をとった。二人して何度も携帯にメールや電話をしたが繋がることはなかった。彼女はあのメールを最後に消えた。見つかったのは川縁に落ちていた一足の靴だけだった。あまりにも不可解なことだが警察はそれでも自殺だと言い切った。

いや、不可解でもないか。あの時起こっていた大きな事件に比べ

ればこっちの事件に力を注ぐことはできないと言った所だったのだろう。まったく興味のない事件と管轄が同じだっただけでこの扱いだ。これじゃあ世間の評価が下がるのも仕方がない。

話が逸れた気がするがそれ以来彼女に会うことはない。一体どこに行ってしまったのか、それを知る術は残念ながら俺にはなかった。

何よりも心配だったのが龍弥のことだ。幼馴染であっただけでなく、いちばん最愛の人を亡くしたのだから心の負担も相当なものだったと思う。それが原因だろうか、彼は変ってしまった。俺に対して相当ひどい暴言をぶつけてきた。正直今それでへこんでいる。お調子者だったけど頼りがいのある良い奴だったのに……。三人でいつも一緒にいた日には戻れないんだなと痛感させられた。

「暗いな……」

時刻は午後7時、窓の外はもう真っ暗だ。

「いつもの場所に行こう。」

いつもの場所、心地よい風が吹き抜ける公園の丘の上。俺のお気に入りの場所だ。何かしら考える事ができた時、そこで寝転がって星空を見上げると心が落ち着く。家のベッドの上でうだうだ悩むより格段に良い。そう思って外に出て足早に公園へ向かった。

「おっと、伝言くらい残してくるべきだったな。」

母親に何の連絡も無しに夜外出するのは気が引ける。きっと心配するだろう。メールで「いつもの公園に行って来る」とだけ送っておく。たったそれだけ？と思うかもしれないが、無駄に色々書き込

むよりはシンプルな方が良いと俺は思う。

「まだ仕事中だったかな？」

メールはすぐには返って来なかったが、少し仕事が長引いているんだろう。ちゃんと送信はされているようだから、後は公園までの道のりを急ごう。

公園の丘の上。池の隣の大木の下。お気に入りの場所に寝転がって星空を見る。

俺と龍弥と彼女の三人でよくここに来た。星空を見上げて他愛のない話をしたり、暑いときには池で水遊びをして管理の人に怒られたり、寒いときには男二人で「根性だ！」と叫んでは体操服（半袖半ズボン）で過ごして風邪をひいたり……本当にいろんなことがあった。どんなに楽しい思い出を思い出しても、今のままではあの頃に戻れやしない。何とかして彼女の行方が知りたい。そうして彼女が戻ってくればきっと今までのように過ごせるだろう。

でも、たとえそうだとしても、どうやって？

そう、どうすればいいのかが全く分からないのだ。警察はお察しくださいだし、俺はまだ学生だ。何をすればいいのか？何をしていいのか？してはいけないことがあるのか？その全てが分からない。

気を紛らわせれば何かいい策が浮かぶかもしれないとこの場所に来たが、結局はただ星を眺めては思い出に耽りため息を漏らすだけ。

「やれやれ、ここにいてもしょうがないか……」

お気に入りの場所でも何も得ることが出来なかった。そのことがとても残念に思えたが、いつも同じ場所というのがいけないのかもしれない。明日からは違う場所にしてみようか、とかどうでもいい事を考えながら立ち上がった。

「……なんだ？」

嫌な感じがした。そうだ、これは視線だ。誰かに見られている？

『わたしたちはみられてる』

不意に彼女の最後のメールが頭をよぎった。嫌な感じが増してきて、その正体を確かめようと周囲を見回した。

彼女が残したのは川縁の靴

そう思い出して、ふと思う。

「水の中にいるのか？」

オカルト的なものかもしれない。そう思うと恐怖と共に好奇心も湧いてくるから困る。どうせ何もありはしないと池を覗き込む。

「ほらな、何もな……い……っ！！」

水面に映っていたのは自分の姿だった。そうだったはずなのに、

それはみるみるうちに姿を変えていった。

頭に赤い宝石の付いた髪飾りを着けた黒いツインテールの女の子の姿。その娘の真紅の瞳と目が合ったとき、不意に意識が途切れた。

「見つけた、『霧原勇人』！」

その娘は俺の名前を呼んでいた。

第一章　魔法の国

少女は言った
迷子だと
少年は答えた
少女を守ると
その約束は過去
今に繋がる小さくも大きな出来事

――魔道砲と紅蓮の姫君――

第一章　魔法の国

いつの間にやら寝てしまっていたのだろうか？目を開けてはいないものの仰向けに寝ているのが分かる。寝ていた？いや、池を覗き込んで、女の子と目が合って、それから……覚えていないな。それ

にしても明るい。目を開けるのも億劫だ。まさかもう朝になっているのだろうか？そうだとすれば起きなければマズイよな。

そう思ってゆっくり目を開けると、心配そうに覗き込む女の子と目が合った。綺麗な金髪の長い髪。澄んだ青色の瞳。何処か気品溢れる顔立ち。

「お目覚めになられましたか？」

綺麗な声だ。凛と澄んでいて何故か懐かしさを感じる。

「あ、ああ……」

大丈夫だと言おうとして、ふと気付く。見上げている先にはうっすらと生い茂る緑の葉を揺らす木々。ここは外なんだろう。だとしたら頭の下が柔らかいのは何故だ？そこまで考えて女の子が覗き込んでいることを思い出した。

「あの、どうかしましたか？」

目を逸らして左を見る。頭が地面よりも少し高い位置にあるのが分かった。そのままの流れで右を見ようと体をひねる。……おうっ！

「ごめん、起きる！」

慌てて体を起こす。右を向く途中、俺の目に飛び込んできたのが彼女の体、それもお腹より上の方だったから焦った。だがそれによって俺は膝枕されていたんだととっさに気付いた。起き上がって改めて地面を確認すれば土。このまま起きなければという思いが浮かんだが、そうなればこの娘の脚を今以上に傷付けていたかもしれな

い。

「急に起き上がって大丈夫ですか？」

俺は彼女の脚の方が心配だったが、彼女はそれ以上に俺の方が心配らしい。

「ああ、大丈夫だ。大丈夫なんだが……」

周りを見回してため息。状況がまったく飲み込めない。見たことのない風景。俺が眠っている間に一体何があったというんだろう。

「まずは自己紹介でもしましょうか。」

彼女の提案に頷く。まずは一番分かり易いところから知っていこう。

「ああ、俺は『霧原勇人』だ。」

「『キリハラ・ユウト』ですね。私は、魔法の国・バーゼッタの王の娘、『リリィク・バーゼッタ』です。」

さっきから仕草が上品だなと思っていたが、何処かの国のお姫様だそうだ。そうなると、膝枕のせいで不敬罪に問われたりしないだろうか？いやいや、そんなことよりも魔法の国だって？何かの冗談だろう。そういえば映研サークルの奴がファンタジー物の作品を撮るとか言ってた気がする。きっとその撮影にドッキリで紛れ込まされたんだろう。全く性質が悪い悪戯だ。

「それではキリハラ、一度城へ参りましょう。ここで説明するより

は良いと思いますので。」

立ち上がって足についた砂利を払う。フードの付いた真っ赤な、えっと、ゲームでよく見るローブとかいうのに身を包んだ女の子。その動きの一つ一つが綺麗で、演技でやっているものとは思えなかった。周囲を注意深く見回してもカメラなんて見当たらない。もしかしたら見えないように完全に隠れているのかもしれない。……いや、今考えることじゃないか。何にせよ城に着けばきっと分かるさ。そうして何も考えないほうが今は良いんだと自分に言い聞かせて姫様の後に続いた。

「なあ、姫様。」

「リリィク、とお呼び下さい。」

「それじゃあ、リリィク、城までは遠いのか？」

いえ、すぐに、と言いかけて急に立ち止まると、後ろ手で止まるように言ってきた。周囲から不穏な気配を感じる。周囲の木々がざわざわと揺れ、赤い光が現れる。一つではなく大量に！

「な、何だこれ！？」

赤い光の正体がゆっくりと姿を現す。木々の間から現れたそれは、鱗に覆われた、そう、まるで二足歩行する蛇のような格好をし、剣と盾を握り締めた人間、その瞳だった。いや、これは人間じゃない。RPGなんかでよく見る『リザードマン』といったところか？

もう一度言うがこれは人間なんかじゃない。開かれた口の中は、演技をしている者がいるようには決して見えない構造だったし、何

よりも聞いたことのない声を上げていた。人が出せるものとは到底思えない声だ。もっとも決定的だったのはその数の方だ。言ってしまうのは気が引けるのだが映研は貧乏人の集まりで、一昔前のハイスペック機材を格安で購入しては大学中を走り回って喜びをアピールしていたほどだったから、これだけの数の着ぐるみと中の人を用意できるはずがないのだ。そういう所に友人がいることを現実からの逃げ道には出来なくなったわけだ。

「ああ、現実か……」

まだ信じたくないと思っていた心が折れた、そんな一言だった。運の悪いことに、誰にも聞こえないように言ったつもりのその言葉はリリィクの耳に届いていた。大きくため息を吐かれたのが分かったが、こればかりはどうしようもない。ホイホイと全ての状況を呑み込んで、理解して、最善の行動をとる、なんてことはもっと出来のいい人間にやらせてくれ。

「キリハラ、これが夢なら貴方が目覚める前に叩き起こしてあげます。」

「ああ、そうしてもらいたいところだけど、もう起きてしまったみたいだ。」

「では、これが現実と理解したのでしたら、私の護衛が来るまで生き残る方法を考えておいてください。」

そう言われても困るわけだが、何とかしないといけないというのはよく分かる。周囲から感じる殺気で息が詰まりそうだからな。

「なあ生き残れなかったらどうなるんだ？」

「彼らの胃袋に収まることになります」

お腹の辺りをトントンと指で叩きながらさらっと言ってのける。この世界では普通にありえる事なんだろうな。俺の居た国じゃ、海外にでも行かない限りこういったことは全くありえない事だったのに……。

さて、これについては後で悩むことにしよう。今はいかにして生き残るかが重要だ。とは言ってもはっきり言って何も出来そうにない。そもそも、彼女は魔法の国のお姫様、そう言っていたはずだ。何か強力な魔法でパパッとやっつけられないんだろうか？

「なあ、リリィク、聞いていいか？」

「はい、なんでしょう？」

「君が魔法の国のお姫様なら、魔法であいつらを何とかできないのか？」

リリィクはリザードマンを睨み付けたまま答える。目を離すのは油断を見せることになるのだろう。

「申し訳ないのですが、今の私には魔法の発動に必要な武器がありません。今持っているのはこの……」

リリィクが何かを取り出そうとして視線を一瞬下げた。その瞬間、彼女の正面に居たリザードマンが飛び掛った。

「危ないッ！」

とっさのことだったが体が動いてくれた。彼女を地面に押さえ付けるようにして覆い被さる。そのローブの影から何かの本が落ちるのが見えたが、それを確認するよりも先に上から迫り来る剣に目が惹き付けられる。

「くっ！」

どうすることも出来ないのは解っていた。それでも少しは威力を抑えられると思ったのだろうか、俺は右腕を剣に向けて突き出していた。ゆっくりと剣が迫って来る様に思えた。カッターナイフで手を切ったことがあったっけ。きっと、それなんかとは比べ物にならないほどの痛みが襲ってくるんだろうな。身を斬り、骨をも砕いてしまいそうな感じがする。彼女を守ろうとしなければこうはならなかったんだろうが、それはできない。彼女は王の娘だという。国の大きさは分からないが、彼女を待っている人は多かれ少なかれ居るはずだ。それはきっと、俺のことを待っていてくれる人達とは比べ物にならないくらいの人数なのだろう。なんと言っても姫様だ。その存在は国にとって大きくないはずがない。だとすれば、ここで命を落とさせるわけにはいかない。それに、俺は残された人の悲しみが如何なる物かを知っている。幸いにも俺はここに来たばかりで、誰の心にも大きな影は残すこともないだろう。

だからと言って、それで良い訳がない。

当然、怖い。母親のことも気がかりだ。元の世界に帰りたい。父親が消えて、更に俺が消えて、残された母親は何を思う？そうだ、まだ死ぬわけにはいかない！なんとしても帰るんだ。そのためには死ねない。だからと言って彼女を見捨てるわけにはいかない。

「ちくしょうッ！」

目を瞑る。怖かったから。

しかし、剣が届くことはなかった。何かが左手に触れて、その瞬間リザードマンの気配が遠ざかった。おそるおそる目を開けると、吹き飛んだリザードマンとその周囲の奴らが警戒して身構える姿。そして、左手にはリリィクが差し出した一冊の本。

「やはり、貴方がそうなのですね」

そう言って立ち上がると突き出したままの右腕に自分の右腕を添わせ正面へと向けさせる。そのまま左手で顔の前に本を開いて持ってくる。

「そこに文字が見えますか？」

背中に感じる体温に意識を集中させそうになるのを堪えながら本を見る。そこには見たことのある文字が並んでいた。間違いなく普段自分で使っているものと同じ文字。

「ああ、見える。だけどこれは……」

「読み上げてください。貴方ならばきっと出来ます」

何が出来るのかはわからない。でも、彼女はそれができれば二人とも助かると、そう言っている様にも思えた。

「分かった、やってみる。」

読み上げる、ただそれだけだ。誰にでも出来ることだと思ったが、彼女はそれをしようとはしなかった。きっとこれは俺が読み上げることに意味があるんだろう。何が起こるか分からないし、何も起きないかもしれない。どっちにしろやるしかない。深呼吸を一つ、目の前の本に意識を集中する。

「……地を……穿ち、天を焦がせ。……我が手に宿りしは炎の息吹。紡ぎ出すは火炎の砲弾。」

突き出した手の先に何か熱いものが集まってくるのが分かる。戸惑いながらも読み進める自分の声にリリィクの声が重なって聞こえた。

「焼き貫け、紅蓮の魔道砲！！」

リリィクと共に最後の一文を読み上げた瞬間、目も眩むほどの轟炎が渦を巻き、正面に居たリザードマン達だけでなく周囲の木々をも焼き払いながら直進して行く。その炎は留まることを知らないように数秒間放出し続け、やがて小さな軌跡へと姿を変え掻き消えていった。

「何だこれ……」

素直な感想だった。これ以外にどんな言葉も思い浮かばなかった。いや、言葉が思い浮かんだだけ良かったのかも知れない。完全に放心するよりは早く状況を判断することが出来たのだから。

正面に居たリザードマン達は消えてなくなったが、他の場所にいた奴等が居なくなったわけじゃない。こちらを警戒するように身構

え、ともすれば全員で飛び掛ってきそうな勢いだ。

「キリハラ、もう大丈夫です」

その言葉通り、何かが炸裂する音が数回鳴ると、それと同じ数だけリザードマンが凍り付いていった。それを見た残りの奴等はあっという間に退却し、木々の奥へと姿を消した。

「姫様、ご無事ですか！？」

銃を構え、両目を包帯で覆った少女がこちらへ駆けてくる。リリィクよりも幾らか年下だろうか？少し小柄である。

「大丈夫です、アリス。この方が守ってくださいましたから」

リリィクの言葉を受けてアリスと呼ばれた少女がこちらを向く。

「私はリリィク姫様直属の護衛隊隊長、アリス・アコウバル・コガラシといいます。不測の事態より姫様を守っていただきありがとうございます。」

しかし、両目を覆っていても見えるのだろうか？そんな疑問が頭をよぎり、まじまじと見つめてしまう。

「どうかしましたか？……ああ、大丈夫です、ちゃんと見えています。そういった魔法を使っているので。」

どうやらこの手の疑問をもたれるのは慣れているらしい。だが、あまり聞かれたくもないらしい。少々嫌そうな顔をしている。きっと始めて会う人にはいつも魔法で見えていると言わなければならな

いのだろう。

「キリハラ……」

黙っているのはまずいだろう、そう言いたげにリリィクが脇腹をつつく。確かに自己紹介をされたのだから返さないといけない。

「俺は霧原、霧原勇人だ。守ったって言っても大した事はしてないぞ。」

「周囲の状況から判断して、あなたは魔道砲を撃ったんでしょう？それはすごい事なんですよ？」

魔道砲？そういえばさっき読み上げた文章……呪文とでも言うのだろうか？あれの最後の部分にそう書いてあった気がする。確かに物凄い威力だったが、だからと言ってすごい事をしたという実感があるわけでもない。

「アリス、キリハラはこの世界に来たばかりなのです。ですから詳しい話をするために城に来ていたただかなければなりません。」

リリィクが唐突に話を変えようとする。俺が困った顔をしていたからだろうか？もしそうだとしたら、ちょっと申し訳ないな。

「なるほど、この方が伽の……」

「アリス、いつまた彼らが襲ってくるか分かりません。今は一刻も早く城に戻りましょう。」

言葉を切られてアリスが少し不満そうな顔をする。確かに彼女が

言いかけた事は気になるが、また襲われるのは勘弁だ。

「城で今言いかけた話も詳しくしてくれるんだろう？だったら早く行こう。」

「……分かりました。」

今すぐにでも話したい、そんな表情は残したまま前に立って歩き始めた。

「さあ、行きましょうキリハラ。」

リリィクもそれに続く。

魔法があって、モンスターがいて……とんでもない世界に来てしまったんだな。不安がないわけじゃないが、何故だか心は期待に満ち溢れていた。昔からこんな感じの物語やゲームが好きだったから、自分をその主人公たちに自分を重ねていた妄想が現実になるかもしれないという期待に過ぎないんだが……。

「もしかしたら……なんて誰もが思うんだろうな……」

「どうかなさいましたか？」

「いや、なんでもない。」

不思議そうにこちらを見るリリィクに続いて歩く。

まずはこの世界のことを知ろう。元の世界に帰る方法はその後、

俺がこの世界に来たことの意味を知った後でいい。昔から父親が「何事にも意味がある」と言っていた。よく聞く言葉だが、何故だかあの人が言うと妙に心に残った。だからだろうか、早く帰りたいとは微塵も思わなかった。勿論帰りたくないわけじゃない。母親のことも気がかりだ。でも、ここに来た意味を知らずに帰るなんて出来ないと思う心の方が強いと感じた。

それと、自分に魔法が使えた事が、早く帰りたいと思う心を弱めていたのも事実だろう。新しい自分の可能性に触れることは、誰にとっても喜ばしいことで、もっと自分の物にしたいと思うのは当然だろう。あの不思議な力を自由に使いこなしてみたい。そういう欲求も、今すぐ帰る必要がないと思わせる要因の一つなのだ。

だが、一番大きな要因は多分……

「キリハラ、考え事ですか？」

「ああ、うん、そんなところ……」

「そうですか。止めるつもりはありませんが、足元には気を付けておいてくださいね。」

「こけないように、だな？」

「はい。」

そう、この娘のことをもっとよく知りたいと思ってしまったこと

だろう。それほど俺にとってリリィクは魅力的に見えたのだ。

第一章　魔法の国　2

城というものは一概に大きいという印象がある。魔法の国・バーゼッタの城も勿論大きかった。

「……すごいな」

まず始めに口を大きく開けて絶句した後、ため息を一つ吐いて出たのがこのセリフである。ちなみに、絶句したのは城の前、ため息を吐いたのは門が開くとき、感想を言ったのが門をくぐる時だ。そんな俺の反応を見て、門兵はクスクスと笑っていた。

「いや、すごいんだって……」

もうそれしか出てこない。今まで生きてきた中でこれほど大きな建築物を見たこともないし、ましてや中に入るなんてあろうはずがない。しかも、歴史的な価値を伝えるために残してある遺跡の類ではなく本当に人々が生活しているのだから、情けないが俺にはすごいとしか言えなかった。

「キリハラ、今から私の父であるバーゼッタ王に会いに行きます。くれぐれも失礼の無い様にお願いしますね。」

城内観察に没頭していた俺に突然リリィクが言う。

「王様は人々から獅子王と呼ばれているんです。あんまり失礼なことをすると頭から食べられてしまうかもですね。」

続けてアリスが脅しにかかる。

「それは凶暴という意味か？」

「いえ、そうではありません。アリス、人をからかってはいけませんよ。」

どうやら取って食われるわけではないようだ。リリィクの言った事はごく一般的なことで、この国を治めている人物に失礼の無い様にということだろう。だが、獅子王という二つ名があるということには少なからず理由があるのだろう。

ただ、暴君という可能性は無い筈だ。それは、城に向かう途中の街の様子からも推測できた。街を行く人々はリリィクを見つけると気軽に挨拶をし、彼女また色々と言葉を交わしていた。王様の話題も勿論出ていたが、何かを恐れるといった感じはなく、誰もが笑顔だったのがとても印象的だった。きっとここには民と国との間に隔たりなどないのだろう。

色々と考えていると、正面からこちらに向かってくる三つの人影が見えた。一人は頭からすっぽりとローブを被り顔を見ることは出来なかったが、後の二人は近付くにつれてはっきりと顔を見ることが出来た。一人は女性、だがどうやら人ではないようだ。見た感じはどう見ても人なのだが、瞳はルビーのように赤く、体からは発せられるプレッシャーがそのままオーラのようになって見える。簡単に言ってしまえば違和感が大きかった、ということになる。ちょっと簡単すぎる気もするがまあいいだろう。それよりも、もう一人の青年の方が俺にとっては重要だった。

「そんな……」

その姿には見覚えしかなかった。幼い頃からずっと一緒にいたのだから見間違えるはずもない。

「龍弥……なのか？」

目が合った。少し驚いた顔をした後、にやっと笑った。嫌な笑いではなく、少し安心しているような不思議な笑いだった。

「よう、勇人。お前も来ちまったか。」

「ああ、ついさっきな。」

「そうかい、だったら一つだけ教えてやるよ。オレ達をこの世界に連れ込んだのは『伽の守人』とかいう女だ。水に映ってるのを見ただろう？」

公園の池を思い出す。頭に赤い宝石の付いた髪飾りを着け、黒い髪に真紅の瞳を持ったツインテールの女の子。

「元に世界に帰りたけりゃ、そいつを探しな。んじゃ、俺は行くぜ。」

「ま、待ってくれ！！」

俺の叫びに片手をひらひらさせるだけで、振り返ることなく龍弥は行ってしまった。

「龍弥……」

去っていく背中をただ見つめるしか出来なかった。言いたいことは一杯あった。だが、あの日以来まともに交わした会話はほんの少

しだった。やはりもうあの頃には戻れないのだろうか？龍弥の姿は通路を曲がって見えなくなってしまった。

「キリハラ、行きましょう。」

リリィクに手を引かれて我に返った。見ればとても心配そうな顔をしている。

「すまない、行こうか……」

今は考えないようにしよう。考えても答えは出ないが、表情には出てしまう。それで周りの人に無駄な心配をさせるわけにもいかないだろう。きっといつか必ず答えが出るはずだ。そう信じて胸の奥にしまっておくことにした。

「もう着きますよ。少し急ぎましょうか？」

「ああ、そうだな。」

さっきよりも少し速めに歩く。なんだか周りから視線を感じるが、何かあるんだろうか？

「何か見られてないか？」

「キリハラの格好が珍しいのではないでしょうか？」

リリィクに言われて周囲の人と自分の格好を見比べてみる。その人達はＲＰＧに出てくる城の住人と同じ様な煌びやか、と言っていいのだろうか？そんな服装をしている。この人達は主に文字や言葉

で戦う人達なのだろう。敵と戦う人達は重々しい鎧に身を包んでいる剣士たちがそうなのだろう。いや、そういえばここは魔法の国だ。もしかしたら、誰しもが戦闘員になり得るのかもしれないな。思い返してみれば、城下町の人々もなにやらファンタジーっぽい格好だった気がする。そんな人達と比べれば俺は普通の洋服だ。なるほど、気にするのもしょうがないか。

「まあ、そうなんだろうな。」

「はい、この国では珍しいですから。」

この国では、と言うことは別の国ではこんな服もあるのだろうか？

「父上とお会いして、その後時間があればこの世界について色々お教えしましょう。まずは急ぎ王の間へ……」

そう言って更に速度を速めるリリィクが前方の大きな扉を指差す。おそらくあれが王の間だろう。国を治める人物に会うなんて人生初だ。否が応にも緊張感が増してくる。

「あー、お二人ともそのまま入るんですか？」

アリスが苦笑いしながら聞いてくるが、一体何のことだろうか？

「どうかしましたか、アリス？」

「いえ、何でもないですよ？」

慌てて目（隠れてるけど）を逸らすと早く中に入るように手で催促してくる。何か引っ掛かるものがあったが、気にしても仕方ない

だろう。それに俺が気にしたところで「そうですか」と言いながら扉を開けようとしているリリィクは止められまい。

「よし……」

小さく気合を入れると大きな音を立てて開いていく扉の奥へと足を進めた。

扉をくぐって、大きく気合を入れておけば良かったと思った。ゲームなんかで見てきた王の間と雰囲気的には同じなのだが、そこに存在する人の大きさ、正確には玉座に座っている人物の存在感の大きさに立ちすくんでしまったのだ。

「……姫様、俺逃げたいです。」

「キリハラ、大丈夫です。」

何故かは分からないが呆れた表情をしたリリィクに並んで前に進む。玉座に近付くにつれて空気までもが振動しているように思えた。やはり王と言う者はこれほどまでに圧倒的なものを持っていなければ務まらないということなのだろうか？そう思うと何か言われた時の為に言い訳の一つでも用意しておいた方が賢明かもしれない。「すみませんお嬢さんに膝枕されてました」とか……。言い訳になってないな……。

何がなんだか分からない思考を繰り広げている間にも前進は続く。玉座前のちょっとした階段前でリリィクが止まったのでそれに合わせて止まる。空気の振動はさっきよりも明らかに強くなっていた。……強くなったからこそ妙な違和感がした。何よりも実際に振動している辺り大いに違和感だ。俺は威圧感でそう感じているだけだと

思っていたが、ここまで来るとそうではないことがよく分かった。

「あー、リリィクさんリリィクさん。」

「どうかなさいましたか？」

そう言いながらも聞かないでくださいと言いたげな表情をしている。だがもう聞かずにはいられなかった。

「ああ、言い難いんだが。物凄く言い難いんだが。俺がさっきからプレッシャーで空気が震えてるとか感じてるこの振動って、これって、もしかしてイビキ……」

「そうですね……」

ハァ……と、とても長いため息を吐いたあと、持っていた魔法書を躊躇いなく王に向かって投げた！それは綺麗な放物線を描いて飛んでいくと、角の部分が王のつむじに直撃した。

「うごっ！」

「おはようございます、父上。」

抗議の目を向ける王、冷ややかな視線で答える姫。そして、後ろで笑い転げるアリス。俺は連れて来られる場所を間違えたのだろうか？なんとも呑み込めない状況である。

さて、考えても仕方がないので王と呼ばれているらしい男を見る。歳は結構若いんじゃないだろうか？薄い金色でぼさぼさの髪はなるほどライオンのオスのようだ。そして、あのイビキは唸り声のよう

だ。まさかとは思うが獅子王ってそういうことなのか？いや、信じたくないぞそんなの！

「あ～、リリとアリスと見知らぬ野郎か。おはよう。で、こいつ誰？……まさか彼氏！？」

「こちらの方は『キリハラ・ユウト』。伽の守人に召喚されて森にいた所を保護しました。」

保護、か……。あまり良い響きとは言えないが、あの状況じゃそうなるんだろうな。そんな不満が顔に出ていたのか、こちらをちらりと見たリリィクが申し訳なさそうな顔をした後こう付け加えた。

「ただ、森でリザードマンの群れに襲われた時には、キリハラが魔道砲を撃ち道を拓いてくださいました。」

「ほ～、何色？」

「紅蓮の魔道砲です。」

「ああ、なるほど、そういうことね。あ～、ユウトだっけ？娘のピンチを何とかしてくれたようで、とりあえず礼を言っとく。ありがとう。」

何色ってなんだろう？とか考えようとしていたところで突然お礼を言われて「はあ、まあ……」と気の抜けた返事しか出来なかった。

「なんだ、お前緊張してんのか？それとも混乱してんのか？」

緊張していたのにノリが軽めな人が出てきたので混乱しています。

「申し訳ありませんキリハラ、父上は『豪快にして爽快な生き様』という信念を持っていまして……」

「うん、なんとなく分かった……」

しかし、ただの軽い人だと思うのは軽率だろう。その瞳には俺を見定めようとする強い力が宿っているのを感じたからだ。重苦しい雰囲気を出さず、かといってふわふわしているわけじゃない。なんだろう、そういった点じゃ少し俺の父親に似ているかな？

「しかし、またアイツか……。他人に迷惑かけるなってあれほど言っておいたのにな。ああ、こっちの話だ、すまんな。色々聞きたいことはあるだろうが今日はゆっくり休んでくれ。部屋はすぐに用意させる。後でアリスに連絡させるから、そうだな、リリと一緒に地下に行ってくれないか？」

「あ、はあ……」

一気にまくし立てられて間抜けな返事しか出来ない。

「ん？あ～、この世界について詳しい奴が地下にいるから会って欲しいんだ。詳しく知っておきたいだろ？」

「あ、はい、そうですね。」

「ははは、敬語なんていらねぇよ。娘を助けてもらった上に魔道砲使いとくりゃあ賓客様だ。俺が敬いたいくらいだよ。」

返答に困ってついリリィクの方を見てしまう。彼女は何も言わずに

頷いてくれたが、本当にいいのだろうか？

「えっと、じゃあ、そうさせてもらおうかな……」

「あ、ただし周りに臣下がいないときだけな。あいつら五月蝿いから……」

「ああ、気を付ける。」

「よし！それじゃ、行って来な。あ～、アリスは残れな。報告もしてもらわんといかんし。」

なるほど、強引な人だが人を惹き付ける力がある。きっとそんな豪快さに敬意を表して人々は「獅子王」と呼んでいるんだろう。

「では父上、行って参ります。」

リリィクがお辞儀をするのに合わせてお辞儀をする。

「あ～、うん、その前に一つだけどうしても聞いておきたいんだが……」

何か聞きにくい話題なのだろうか？目を逸らしながらも、ちらちらとこっちを見ながら聞いてくる。

「どうかなさいましたか？」

「その、なんだ……。うん、お前らなんで手繋いでるの？」

「は？」

「手？」

リリィクと顔を見合わせる。そしてその視線を下げると……

「あー、だから『そのまま入るんですか』って聞いたのに……」

視線の先にはしっかりと繋がれた二人の手があった。

「リリィクさん。」

「はい、なんでしょう？」

お互いに視線は上げずに繋がれた手を凝視して体を震わせる。

「いつから？」

「いつからでしょう？」

みるみるうちにお互いの体温が上昇していくのが分かる。

「なあ、恥ずかしいなら離せば良いんじゃないか？」

王にそう言われてどちらからともなく手を離す。恥ずかしくてお互いの顔なんて見れたものじゃない！

「ははは、まあ理由はどうでもいいや。面白いもんが見れたしな。さあ、行った行った。」

豪快に笑いながら退室を促す王と、こちらに背を向けて小刻みに

肩を震わせているアリス。俺とリリィクは踵を返すとそそくさと扉に向かって早足で進んだ。扉までの距離が物凄く長く感じたのは言うまでもない。

「……行ったか。アリス、報告を。」

「はい、やはり外部から侵入された形跡はありません。おそらく……」

「ああ、十中八九あいつの仕業だな。そうなるとこの国自体が危ない。」

「調査と根回しは任せてください。」

「何事もない、なんてことはありえないだろう。数ヶ月以内に事を起こすはずだ。奴の監視とユウトを守護すること、それから国民の安全を最優先だ。抜かるなよ？」

「あの、姫様は？」

「あいつに魔法は一度しか効かないようなもんだ。外部からの侵入者じゃない限りは魔法使いが主力のはず。となれば防御魔法が得意なあいつには誰も勝てんよ。万が一ということがなければな……」

「そうですね……。ですが、本当に危険なときには私が！」

「ああ、それはお前にしか任せられないな。……ところでアリス、なんで二人は手を繋いでたんだ？」

「理由はどうでもいいって言ってませんでした？」

「バカ、お前、娘が見知らぬ男と手を繋いでおはようございます、だぞ？気にならないわけがないだろう？」

「はは、そうですね。」

「で、何であんなことに？」

「はい、実はリュウヤ殿とユウト殿が廊下で鉢合わせしたのですが、どうやらお二人はお知り合いのようで少し話をしてリュウヤ殿が去っていかれたのです。しかし、そのままユウト殿は動こうとせず思い詰めた表情をしていました。それで心配なさった姫様が手を引いて、それではっとした様子のユウト殿は姫様に促されるままこちらに……」

「……あ～、複雑な事情があるんだろうな。追求しない方が良さそうだ。しかし、リリの奴があそこまで真っ赤になって俯くのなんて初めて見たぞ。」

「ガルオム様は父親として悔しい、と言ったところですね？」

「まったくだ。それに、俺にだってそこまで優しくしてくれたことないぞ？……まあいいや。さて、お前もそろそろ……」

「はい、行ってきます。」

「頼んだぞ、俺も出来る限りのことはしておく。」

第二章　機械人形と守護龍と……

過去の記録はおぼろげで
消え去ったものもあるだろう
たとえそうだとしても
彼女達はそこに居て
それぞれにその意志を貫き続けるのだろう
いつか消え逝く運命だとしても……

第二章　機械人形と守護龍と……

「まあ、これでも食べなさい。」

何がなんだか分からない。地下に案内されたと思っていたら、そ

こにいた小柄な女性が電子レンジで暖めたカレーを差し出してきた。

「すみません、状況が全く呑み込めません。」

ここは異世界で、魔法の国で、なのにここにあるのは俺の国にあった文明の利器とほぼ変わらないものばかり。そしてレトルト食品でカレーときたものだ。

「どうかしましたか、キリハラ？」

俺の横には何食わぬ顔でスナック菓子を頬張るリリィク。なんだろう？俺の認識が間違っていたのか？ゲームでよくあるファンタジックな世界じゃなかったのか？

「さて、いい感じに混乱してきたみたいね。これからこの世界について教えてあげるわ。」

「出来れば普通に始めて欲しいです」

俺の懇願は聞き流され、彼女の後ろにあった『ぱーそなるこんぴゅーた』の前に案内された。いわゆるパソコンである。しかし、説明されずともそうだと分かるあたり問題大有りだな。

「君のその顔を見れば、この世界をファンタジックな物だと誤解しているのは分かるわ。でもね、実質的な文明の発達で言えばこの世界の方が優れているわ。この国は魔法が発達しているから科学の力を使う人が少ないのよ。」

そう言いながら軽快にキーボードを叩き、この世界の地図らしき物を画面に表示させる。それは十字にかたどられたオブジェのよう

にも見えた。

「この世界の名は『ミートゥリア』、四つの国と一体の守護龍、そして衛星によって守られているわ。そして、紹介が遅れたわね。私は君たちのような来訪者に世界のことを伝える役目を担う機械人形。名前は訳あって言えないから『機械人形』と、そう呼んでくれてかまわないわ。あと、敬語も要らないわ。」

「あ、ああ、俺は霧原勇人。よろしく頼む。」

この国の人は敬語が嫌いなんだろうか？

「その名前、陽の守の国の出身ね。出来れば漢字でどう書くのか教えてくれるかしら？来訪者のリストを作っているから……」

何で俺の出身が分かるんだろう？そう思いながらも促されるままキーボードの前に立つ。配置は俺が使ったことのあるものと同じ。これなら普通に打ち込めるな。疑問は尽きないが……。

「霧、原……勇人……ね。なるほど……」

「素敵な名前ですね。覚えておきます。」

二袋目のスナック菓子に手をつけようとしながらリリィクが画面を覗き込んでいる。名前を褒められたのは嬉しいが、間食は自重した方がいいと思う。一人で一袋空けたわけだし……。

「あら、もう二袋目なの？自由に食べていいとは言ったけれど、少しは自重した方がいいと思うわ、身体的に考えて。」

俺の言葉を機械人形が代弁してくれたが、リリィクはそれを聞く気がないらしい。言われながらも袋を開けてしまった。

「私が沢山食べる理由、貴女はご存知でしょう？」

不満そうな目を機械人形に向けながらスナック菓子を頬張る。食べる理由ってなんだろう？

「分かっているわ。少しいじわるしてみたかっただけよ。さて、話が逸れたわね。まずはこの国、バーゼッタについて説明するわ。……あなた、ゲームはする方かしら？」

「ああ、かなり。」

自慢じゃないがゲームは大好きだ。ＲＰＧに始まりアクションやシミュレーションなど本当に幅広くやっている。が、ここでこんな質問をされるとは思っていなかった。

「そうでしょうね、前例と同じ反応をされたからそうだと思ったわ。」

前例？前にも同じ様な奴が来たんだろうか？……と、問いかけようとして龍弥のことを思い出した。そういえばあいつも俺に負けず劣らずのゲーマーだった。つまり、あいつも俺と同じ様な疑問を持って、同じ様な質問をし、そして同じ様な答えを返されたわけだな。俺はまだ質問すらしてないが……。

「先に言っておくわ。この国はあなたが多分よくプレイしてきたでしょうＲＰＧでよくあるファンタジックな国と思ってもらってかまわないわ。魔法で発展し、魔法に頼って生きている国と言うわけね。

」

ふむ、そういう認識でいいのか。だが……。

「ちなみに、この国は世界の中央に位置することから央天とも呼ばれているわ。次に、あなたが質問するであろう機械文明の発達した国の説明ね。」

この人俺に質問させない気だ……。俺が口を開こうとしたときには地図の東端がアップにされていた。

「東天の『ラトラ』は機械文明で発達した国よ。元々は武器製造で栄えた国だったけれど、今では銃火器以外の武器製造はほとんど行っていないわ。この国はバーゼッタのような王政ではなく『ユエル・アコウバル・コガラシ』と言う女性……まあ、今はその説明でいいわね……その女性を有する『コガラシ家』をトップに、武器製造を担う『アンテマルド家』、隠密集団の『キサラギ家』といった三つの勢力と、それらに属する職人達によって成り立っているわ。」

「あれ？アコウバル・コガラシって確か……」

確かアリスのフルネームがアリス・アコウバル・コガラシだったはず。

「はい、アリスはラトラの出身です。」

リリィクがすぐに答えてくれた。ちなみに、彼女は三袋目に手を出しています。

「あら、あの子に会ったことがあるのね。あの子は銃の名手よ。ハ

ンドガンからスナイパーライフルまで何でも使いこなすわ。ふふ、姫様に何かしたらどこからともなく撃たれるから注意しておきなさい。」

とてつもなく危険な情報をどうもありがとうございます。膝枕のシーンを見られてたらここに俺はいなかったかもしれないな……。

「あの子にも色々あるけれど、私が言うことではないわね。気になることがあるのなら直接聞きなさい。さて、次は何処にしようかしら？」

本当に俺に質問させる気がないんだな。まあ、それでもいいけど……

「ん？」

こちらに背を向けてパソコンをいじる機械人形の背中に不思議な感じを覚えた。彼女は薄い金髪なのだが、ロングだと思っていた彼女の髪に違和感を覚えたのだ。よくよく見れば、白衣の襟の辺りから外に漏れ出たような毛の塊が九本見える。

「多尾狐みたいだな……」

意識していなかったが、口から言葉が漏れていた。その言葉に驚いたような反応した後、振り向いて納得したような表情を見せた。

「そうか、陽の守の国の出身だったわね。その名前は『妖弧』のことかしら？」

「あ、ああ、文字通り個体によって尾の数が違う狐のことだ。正式

名称は『多尾狐』だけど多くの、主に外国の人なんかは『妖弧』って呼んでいるな。」

少し昔を懐かしむような顔をして、すぐに嫌そうな顔に変わった。言ってはいけないことを言ってしまったのかもしれない。

「……私……いいえ、私が機械人形になる以前、私はとある人間に作られたクローンだったの。ヒトの遺伝子と妖弧の遺伝子を組み合わせて作り上げられた人ならざる者……」

悲しそうに笑ってこう続けた。

「そして今は自ら作り上げた機械の体で永遠に生き続ける運命に囚われているわ。話が逸れているけどこれだけは忠告しておきたいの。」

そう言ってじっと俺の目を見つめる。その目には強い力が感じられた。

「ストラーと名乗る者に気を付けなさい。いつ現れるか分からないけれど、いずれ必ず現れるはず。あなたが出会わなければそれに越した事はないのだけれど……」

この人は一体どれだけの時を生きてきたのだろうか？きっと何かを背負って一人で戦っているのだろう。追求するつもりはないが、忠告はしっかりと心に刻んでおこう。

「さて、話を元に戻すわね。次は……そうね、南天の『ロワール』にしましょう。」

画面には南端の地図が拡大表示された。周りを高い山々に囲まれた国のようだ。

「ロワールは見ての通り山に囲まれているわ。交通手段は洞窟を抜けるか山を越えるかしかないわ。残念ながら今この世界には空を飛ぶ技術はないの。魔法の組み合わせ次第で短距離飛行は出来るけれども、山を越えるのには向いてないわね。もし出来ても止めておきなさい。」

まだ魔道砲とか言うのしか撃った事がありませんのでご安心ください、と心の中で言っておいた。

「この国は、生身による戦闘を主眼において心身の修行に励む人々の集まりで出来ているわ。それ故に王政ではないけれども、驚異的な能力を持った『雷龍・カミガナルカ』が守護しているの。その龍を護衛するのが『近衛守護気功団』と呼ばれる者達よ。彼らが実質的にナンバーワンといってもいいわね。気功団はその名の通り自身の気を操り戦う集団よ。その頂点に立つ者は身体を金剛石の如くまで硬化させる事が出来るらしいわ。あくまで守護を主とするために攻撃の面ではさほど役に立つ訳ではないらしいけれどもね……」

気功、ね。どうも俺のいた国ではそういったインチキが多かったせいか、にわかには信じ難いな。会って見れば違ってくるかもしれないが。

「ちなみに、そこのリリィクの義理の妹『ルアココ』が今この国に留学中よ。」

「機械人形、その名を言っては駄目ですよ。」

「あら？ああ、そうだったわね。訂正するわ。リリィクの義理の妹『ココ』が留学中よ。」

よく分からないが何かあるらしい。詳しくは聞いても教えてもらえないんだろうな。どうもそんな雰囲気だ。ちなみにリリィクのお菓子は六袋目に突入しました。

「最近は守護気功団の団長引継ぎを巡って色々あるみたいだから、もし行くときは気をつけなさいね。」

なんだか忠告されてばっかりだ。そもそも彼女一人で喋り続ける気がするんだが、機械だと喉が疲れないから構わないんだろうか？

「次は、西天の『ガルマンド』ね。」

このまま最後まで黙って聞いていよう。西端の地図を拡大する機械人形を見ながらそう思った。

「この国は剣術が優れているわ。生活様式はほとんどこの国と同じだけれど、魔法に頼ってはいないわ。国を治めるのは『カルメア・ガルマンド』女王、優秀な双剣の使い手よ。カルメア女王の代になってからはバーゼッタとの交流が増えたわ。その象徴としてガルマンドでは魔法を剣術に生かす研究が成されているわ。そして、バーゼッタには近々優れた剣士たちが派遣されてくる予定よ。その歓迎式典が魔法大会と同時に開催されるわ。ふふ、それまでに魔法を詳しく教わって出場してみたらどうかしら？」

結果はきっとボロボロだろうな。出来ればやめておきたい。

「どうです霧原、出場してみますか？」

なんだかキラキラした瞳で見つめられてしまう。お菓子は七袋目だ。

「えっ！？あ、ああ、そうだな……」

やめておきたいとか考えながらも、リリィクが期待に胸を膨らませているらしいことに気付いてしまうと心が揺らぐ。魔法大会がどういったものか分からないが、良い結果が出せれば彼女は喜んでくれるかもしれない。そこまで考えが到達すると俄然やる気が出てくるのは悲しい男の性なんだろうな。

「出てみようかな。」

そう言った瞬間、彼女が微笑んだ。

「はい、期待していますね！」

言って良かった！よしっ、頑張ろう！！

「……なるほど……」

何やら機械人形に納得されてしまった。すみません、自分男なんで、悲しい性を背負っているんで……。

「ふふ、私が説明するのはこれくらいにしておくわ。北天については明日にでも『守護龍』に会って聞いたほうが詳しく分かるでしょう。」

そう言って機械人形はパソコンの電源を落とすと俺の手からカレ

ーを奪い取る。そういえばあったな。すっかり忘れてた。

「温め直すわ。その間にあなたの得意な属性を調べましょう。」

「属性って……魔法の？」

「ええ、そうよ。ちなみに龍弥は水だったわ。そういえばあなたは紅蓮の魔道砲を撃ったそうね。でもそれはあなたの属性ではないわ。残念ながら、ね。」

意地悪な笑みを浮かべてふふっと笑う。

「炎が得意じゃない、ということか？でもあれだけ凄まじいのを撃ったわけだし、にわかには信じがたいんだけど……」

「いずれ分かるわ。でも、私の口からは言えないわね。ふふ、あなたの得意な属性は風よ。」

調べる、と言っていたのにあっという間だ。もしかして今の会話の間によく分からない手段で調べられていたのだろうか？

「調べるまでもないわ。だってあなた、お父様にそっくりなんだもの。」

「お父様？君の？」

「違うわ。あなたのよ、霧原勇人。あなたはあなたのお父様に見た目がそっくりなのよ。ロワールにいる『霧払いの使徒』にね。」

「は？俺の父さん？霧払いの使徒？」

ふと、俺が小さかったときの父親の言葉が脳裏をよぎる。

『父さん魔法が使えるんだぞ！』

『風を操れるんだぞ！！』

『実は父さん別の世界からやってきたんだぞ！！！』

……父さん、俺は今まで冗談だと思ってたんだが……

「彼もあなたと同じく『伽の守人』に世界を行き来させられた人間の一人なのよ。あなたとの違いは元々こちら側の人間だった、ということね。」

「だからあんな不思議な名前だったのか……」

「あら、なんて名乗っていたのかしら？」

「きりはら　しとう……霧原紫藤だよ……」

「……そのままね……」

なんだか恥ずかしい。ほとんどノリだけで生きてるような人だったけど自分の名乗り方もノリで決めてたのか……。まさかこんなところで生存を確認できたうえに身内の恥をさらす事になるとは思わなかった。是非ともロワールに行く機会を作って会いに行かなくてはならなくなってしまったな……。

「ふふ、彼は元気よ。近い内に会えるといいわね。さあ、これを食べたら今日は帰りなさい。」

またもや忘れかけてたカレーを受け取った。

しかしこの世界、食べ物や機械、使う文字やら言葉やら何やら俺がいた世界とほとんど変わらない。だからこそあまり混乱することなく馴染む事は出来るかもしれないが、疑問は尽きない。明日会うという守護龍はもう少し詳しく教えてくれるだろうか？

そして、父親が生きていると言うことをここで知ることになるとは思わなかった。だとしたら、龍弥がいて俺がいて父さんがいて……あの娘は？

「ごめんなさい、女の子が召喚された記録はないわ。」

機械人形はそう答えたが、彼女も見られていたということを思い出すと、やはりこの世界にいるような気がしてならなかった。

ちなみに、リリィクはスナック菓子を十袋、一人で完食していた

⋮

第二章　機械人形と守護龍と……　2

守護龍の神殿に向かう道中、俺たちには物凄い人数の護衛が付いていた。普段の城下町の外への外出ではこれほど多くの護衛が付くことはないらしい。アリス率いる護衛隊で充分なのだそうだ。それほど優秀な部隊という事だろう。

では何故今回これほどの護衛が付いたのか？

「最近になってのことですが、『ソリ・アリ』と呼ばれるする無差別殺人鬼が出没しています。少々息苦しいですが安全のためです。我慢してくださいね？」

物騒なことだ。しかし、これだけの人数がいて全く油断している様子がない。それが当然なのかもしれないが、確かに息が詰まりそうだ。それほど気を抜けない相手であるとも取れるな。

「それから霧原、私もそうですが貴方もこれだけの人に守られるということがどういうことなのか、その意味をよく考えて理解しておいてください。」

人数の凄さに目を奪われて考えもしていなかった。確かにリリィクは王の娘だから厳重に護衛されるのは当然だろう。だが、これだけの厳重さだ。少数では全滅しかねない相手であると、そういうことなのだろう。つまり、多かれ少なかれ人が死ぬ可能性がある、と言うことだな。そして、彼女がその意味を考えろと言ったのは、おそらく護衛の対象が彼女だけでなく俺にまで及んでいるからだろう。

これだけの護衛を出したのは王の命令だった。王やリリィクがど

うしてこれほどまでに俺に対して力を尽くしてくれるのかが分からない。昨日一日のことだが、城の人も良くしてくれるし、リリィクはずっと俺に付いてくれていて魔法についても少し教えてくれた。王も手が空いてはその度に様子を見に来てくれた。……もっとも仕事をサボってきていたようで要職の方辺りに連れ戻されてはいたが……。

もしかしたら来たばかりで不慣れな俺に対しての『最初の内の配慮』だったのかもしれないと思ったが、どうやら違うようだ。リリィクは言った。

「ストマ大臣には気を付けて下さい。リュウヤさんのように引き込まれては戻れる保障はありませんから……」

戻ってはこれない。それが何を意味するのかは分からなかった。だが、少なくともリリィクの反応を見る限りその大臣には何かあるようだった。

「俺が守られる意味、か……」

今日のつぶやきは周りの人達に声をかけて回るリリィクには聞こえていなかった。まあ、つぶやく度に聞かれるのも嫌だが、少し残念な気がした。

兎にも角にもどうやら俺は国賓級の扱いらしい。魔道砲が使える、と言うことが最大の要因みたいだが俺自身は実際よく分かってない。リリィクが魔法を教えてくれているときにさり気なく練習してみようと思ったが、厳しく止められてしまったくらい危険なものだ。もう一度俺に撃てるのかと聞かれれば正直分からない。あの時はリリィクの持っていた本があったが、もしかしたらアレがないと出来ないのかもしれないし……。

撃てるかどうかは置いておくとして、魔道砲使いがここまで大事にされる理由は聞くことが出来た。どうやらこの世界全体を不穏な空気が包んでいるらしい。

例えばこの国では先程リリィクが口にした『ソリ・アリ』と呼ばれる者の出現がそうだという。

機械人形に聞いた話では南のロワールの守護気功団では団長引継ぎを巡っていざこざがあるみたいだ。

西のガルマンドではカルメア女王の息子が行方不明だそうだ。リリィクに聞いた話だがどうもこの息子、地下大図書館とやらに数年間引きこもっていたらしい。外に出ることは良い事だと思うのだが、どうやらそういう問題ではないらしい。

東のラトラでは武器製造を担うアンテマルド家内部で怪しい動きがあるらしい。武器を売るために戦争を起こす火種を作る可能性があるという話だが、こればかりは表立って動くものではないから、どの国も現状を把握しきれていないらしい。

魔道砲使いが大事にされる理由は、遥か昔に創られたとされる伝説に起因しているという。

伝説によると、かつて遥か彼方の宇宙から飛来し北天の地に落ちた龍がいたという。落下したときに出来た傷を癒すためにしばらくは眠っていた龍だったが、傷が癒え永い眠りから目を覚ますと破壊の限りを尽くしながら南下を始めたそうだ。龍が央天に到達する寸前、守護龍率いる魔道砲使い達が現れ、その力を以て龍を北天に押し戻し、そのまま守護龍による封印がなされ今に至るのだという。つまるところ『世界を救った伝説の英雄』といういわけだ。

そして、現在の情勢を見て人々は不安を覚え、伝説にすがる事で心の安息を得ているのかもしれない。なにしろ伝説ではなく本物の魔道砲使いが現れたわけだ。誰だって祭り上げたくなるだろう。

「伝説の英雄の再来、か……」

英雄。そう称されて嬉しくない奴なんていないだろう。俺だって悪い気はしない。だが、俺はまだこの世界に来たばかりで、そもそもずっとこの世界にいられるのかも定かではない。魔道砲が撃てるからといってホイホイと「英雄やります」とは言えない。リリィクが魅力的だったからという不純な動機でここにいるなんてことも口が裂けても言えない。

では、この世界に居ながら世界の動きを見て見ぬふりをするのか？

それは出来ない。

今は流されているだけかもしれないが、この世界に来た理由を見付けるのならこのくらい大きな流れがいい。おそらくこの流れを外れたら答えは見つからないだろう。なんとなくだがそう思った。

しかし、流れに乗るのはいいとして、問題は人々の期待に答えられるかどうかだな……

「霧原、険しい表情ですがどうかなさいましたか？」

「いや、ちょっとな……」

気付けば眉間にしわを寄せていた。リリィクは心配そうな顔で俺を見ている。

「ここまで期待してくれている皆に対して俺は何ができるかな？ってちょっと考え込んでた。」

「ちょっと、ではないでしょう。少し周りを見渡してください。」

リリィクに促されるまま周囲を見渡す。さっきまでとは全く違う風景が広がっていた。

「大きな橋の上だな。」

陸地を歩いていた記憶はあるが、いつの間にか橋を渡っている最中だった。それに気付かないほど考え込んでいたのか……。

「橋を渡った先にある小島の神殿に守護龍様はいらっしゃいます。大勢で行くのは迷惑になるでしょうから護衛の方たちは渡り終えた所で待機していただいて、私と霧原の二人でお会いすることになります。」

「ソリ・アリとやらは大丈夫なのか？」

そのために護衛が付いてたはずだが……

「はい、橋を渡ることを極端に嫌う傾向があるとの報告があります。心配は無用でしょう。」

遭遇して生還した人は皆この橋の方に逃げて助かったらしい。どういう訳か分からないが橋に差し掛かるとソリ・アリは踵をかえし去っていくのだという。万が一、ということは考えたくないが、これほどの護衛を置いていっても大丈夫だと言えるなら信じるしかないだろう。

「それでは行きましょう、霧原。」

「ああ、そうだな。」

橋を渡り終え神殿に向かいながら、失礼の無いように振舞わないといけないなとか考えていた。守護龍というくらいだ、相当に威厳のある龍なんだろう。何よりも龍というものに会うのが初めてだ。不安よりも期待が高まってしまう。

そのはずだったが、その期待以上に俺は何か心を不安にさせるものを感じていた。

第二章　機械人形と守護龍と……　3

それは神殿、というには少々粗末かもしれないと思った。長くなだらかな階段を上り、大きな柱に支えられた門をくぐる。薄暗く生暖かいエントランス。バーゼッタの城に比べれば狭く、ただ建材を組み合わせて作っただけの様な芸術の一つも施されていない内装に気味の悪ささえ感じる。正面の大きな扉の向こうに守護龍が居るのだろうか？何かが居る、そんな感じだけが伝わってくる。

「誰かいるのですか？」

不意に左側の通路の奥から声が響いた。それと共に靴音が近付いてくる。そして、声の主がエントランスに踏み入った瞬間、今まで薄暗かった空間が眩いほどに輝きだした。

「あら、姫様でしたか。するとそちらの方が……？」

「はい、霧原勇人様です。」

眩しい。辛うじて薄目を開けてリリィクを見れば、しっかりと目を瞑っている。もしかしてここではいつもそうなのか？

「あっ！申し訳ありません。ゆっくりと光度が落ちるまで辛抱してください。」

照明機器に問題があるのか？できれば先に言っておいてほしかった。

「まだ光の調節になれないもので。来客もあまりないものですから

疎かになりがちなのです。」

「あ、いや気にしないでくれ。」

目が慣れてきたのか光度が下がって見やすくなったのか、ともかく周囲の状況は確認できるようになってきた。

よく見ると声の主は小さな女の子だった。とても長くて薄い水色をした髪を無理矢理赤いリボンで結んだようなツインテールが特徴的だ。特徴的なのは髪型だけじゃない。赤いリボンもだ。どうやら髪を縛ってそのまま下にたらして首の前で結んでいるようだ。頭頂部には二つの目玉のような球体が二つ付いている。これもリボンについているんだろう。ううむ、服装もまあ個性的だし、この世界に来て始めて理解し難いものに触れた気がするな。

「目、開けないのか？もう眩しくないだろう。」

少女もまた目を瞑っていた。眩しさに耐えるためかと思ったが、どうやら違うようだ。きょとんとした顔をされてしまった。

「あっ、これは眩しいから瞑っているわけではありませんよ。いろいろと事情がありまして。視覚はこの二つのビットで補っていますので気にしないでいいですよ。」

そう言いながら頭に付いている二つの球体を指差す。よく見ればそれがこちらをじっと見つめている。ますます理解し難くなったようだ。あまり追求しないで、この子はこういうものなんだと思っておこう。

「自己紹介がまだでしたね。私は守護龍の娘、『アルトラ』と申し

ます。」

「俺は霧原勇人。よろしくな。」

お互いの名前を告げ、彼女の方から差し出した手をとり握手を交わす。本当に小さな手だ。守護龍の娘というくらいだから人間じゃないんだろうが、人間にしてみれば五・六歳くらいといった感じに見える。

「さあ、奥で父様……守護龍様がお待ちです。扉を開けますので。」

そう言ってくるりと扉の方を向くと手をかざして何やら小声で唱えだした。それに反応して扉が開いていく。

「行きましょう、霧原。」

「あ、ああ……」

今になって緊張してきたとは言えず、リリィクに促されて扉の先に進んだ。

一歩踏み出して驚いた。床の感触が土に変わったからだ。

「どうなってるんだ?」

神殿の外に出てしまったのか、とかありえない事を考えてしまったが、そういうわけではないらしい。その疑問にはゆらゆらと揺れる陽炎を纏った様な紅く巨大な龍が答えてくれた。

「我が土を好んだだけだ。それ故混乱させてしまったようだな。こ

こに初めて来る物は誰しもがそのような反応を示す。汝もそうであったな、紅蓮の姫君よ。」

リリィクが一歩前に出てお辞儀をする。

「はい。お久しぶりです、守護龍様。お元気そうで何よりです。」

「その紅蓮のローブは汝の母親から貰った物だったな。あの娘は元気にしているのか？」

「さあ、母上とは自由に会えるものではありませんから……。それよりも守護龍様、今日は……」

リリィクがちらりと俺の方を見る。それに合わせて守護龍がこちらをしげしげと見てくる。こういう風に考えちゃいけないんだろうが品定めされてるみたいで嫌な感じだ。

「ククク、分かっている。霧原勇人よ、北天について聞きに来たのだろう？上を見るがいい。」

言葉に従って上を見ると、不意に周囲が真っ暗になった。そして、何かが落ちてきた。

「映像だ、怯えることはない。」

それは大きな龍が落ちてくる映像だった。銀色の体に青色の心臓を持った龍が落ちてくる……。

「伝説については聞いているな？これが北天に落ちた龍『星啜り』だ。この呼称は星啜りを追って現れた『衛星の守護者』によっても

たらされたものではあるが、龍が星の命を啜る為にそう呼んでいるのだという。今は眠りについているが、一度目覚めたことがある。多少脚色されてはいるが書物にもなっていたはずだ。一度読んでおくといい。」

龍の映像がふっと消えてこの世界の地図が映る。

「これが我々の今居る世界『ミートゥリア』。北部の海に隔てられた地、そこが北天だ。星啜りが落ちる前はエーテルの豊富な地であったと聞いている。」

「エーテル？」

聞いた事がない言葉だ。

「魔法を使うときに反応する元素だと聞いている。我もこの星に最初からいたわけではない故に詳しくは知らぬがな。この世界で魔法を使うということは少なからずエーテルと反応するということだと認識しておけばいいだろう。」

エーテルについては詳しく説明してくれる気はないらしい。興味自体なさそうだ。

「さて、話を戻すぞ。かつてこの地にはエーテルとの反応値が常人との比にならないほど高い者が生まれる事があったという。あまりにも自然にエーテルを吸収し、あまりにも自然に使役するその姿は、並び立つ者がいないほど神々しいものだったという。北天の地にはかつて小さな村があったようだが『ストラー』と呼ばれる者によって滅ぼされた。しかし、ただ一人残った少女がいたそうだ。我は残っていた写真でしか見たことはないが……ふむ、映像を出そう。」

守護龍と俺達の間の空間に一人の少女が映し出される。その姿に俺は見覚えがあった。

「伽の……守人！」

頭に赤い宝石の付いた髪飾り。黒いツインテール。そして真紅の瞳。俺をこの世界に引きずり込んだ人物に間違いなかった。

「ほう、やはりか。この者はかつて北天の地でストラーと戦い、双方共に消息不明となっていたのだ。だがここ数年、ガルマンドの地下書庫に現れては歴史書を読み漁っている。どうやら記憶をなくしたらしい。それを取り戻す方法を模索しているのだろう。しかし、そのために他人を犠牲にしすぎていることが気にかかる。よほど大切な思い出があるのだろうが、もう少し方法というものを考えて欲しいところだ。」

守護龍がボフッと鼻息を吐いた。ため息のようだがこの体の大きさになると勢いがすごい。

「……さて、その者とストラーが北天の地にて対峙していたその時、空から星啜りが落ちたのだ。その衝撃に紛れて二人は消息を絶ち、星啜りは地中深くにて眠りについた。星啜りは凄まじい勢いで周囲一体のエーテルや生命エネルギーを吸収した。その影響で北天は今や荒れ果てた不毛の大地と成り果ててしまっている。今は我が封印を施している故落ち着いてはいるが、いずれはより強固な封印を施さねばならないだろう。そのために調査団を派遣したのだが……」

またもやため息を吐いた守護龍は、俺が見ても分かるくらい落胆の表情を浮かべていた。

「失敗……だったんですか？」

「うむ、大人達は帰って来なかった。二人いた子供は帰ってきたものの、星啜りの強い思念に引きずられたのか、まるで別人のようになってしまった。……我の責任、なのだろうな……」

守護龍は悲しそうな声だった。自分のせいで不幸をの種を蒔いてしまった事を悔いているのだろうか？

「む、すまぬな、我のしてしまったことはいずれ償いをしなければならぬだろう。今日のところはこれ位で良いか？少々疲れたのでな。」

「はい、ありがとうございました守護龍様。」

「紅蓮の姫君、そして霧原勇人よ、我の話が何かの役に立てば良いのだが……」

「北天のことを知れただけで充分過ぎるほどです。それに伽の守人のことも少し分かりましたし。」

本当はもう少し色々なことを詳しく聞きたかったが、無理をさせるわけにもいかない。守護龍自身もそれは感じているようだ。申し訳なさそうな表情を見せる彼に一礼と、一言礼の言葉を述べてリリィクと一緒に部屋を出た。

「お疲れ様です。父様はしばらくお休みになられるでしょう。しばらくの間ここには来られませんようお願いします。誰にもお会いにならないと思いますので。」

部屋を出たところにアルトラが待っていた。そっけなく伝えたいことを伝えるとそのまま通路の奥へと去っていこうとした。

「君は、誰かに会ったりしないのか？」

俺は何故だかそんな質問をしていた。

「私が……誰かに……ですか……。……考えたことがありません。お客様が来られる以外はずっと父様と二人きりで過ごしていましたので。……私には会える誰かがいるのでしょうか？」

「私ならいつ会ってくださっても構いませんよ。だからそんなに悲しそうな顔をなさらないでください。」

「悲しそうな顔、ですか……よく分からないものですね。ですが、ありがとうございます。近いうちに会いに行きますので。」

そう言って通路の奥へと消えてしまった。

「……霧原、何故あのような質問を？」

「何て言うか、寂しそうに見えたんだ。だから声をかけた。それだけだ……」

「そうですか、お優しいんですね。」

「……そんなんじゃないさ……」

リリィクに優しいと言われて少し嬉しかった。

しかし、彼女はいつからずっとここに居るのだろうか？守護龍と二人きりで、彼女にとってはそれが全てなんだろう。だが、それに対して心の奥底の自分でも分からない所では寂しさを感じているんじゃないだろうか？彼女の質問に答えてくれたリリィクも同じ様な考えだったのかもしれない。俺は、いつか彼女がその小さな体に詰め込んだ想いを解放できる日が来ればいいなと思った。

第二章　機械人形と守護龍と……　4

神殿から出て橋へと向かう。そこではすでに護衛の兵士たちが出発の準備を終えて待っていた。

「お待たせいたしました。では、城へ戻りましょう。」

リリィクの言葉に従って兵士たちが来たときと同じ陣形をとる。リリィクと俺を守るための陣形だ。

行くときに考えていたことを思い出す。俺はどれだけ人々の期待に応えられるのだろう？だが、ふと今の俺には応えられないなと思った。たった一回魔道砲が撃てただけの俺に何かできるはずもない。魔法についても詳しく知らない。この世界のことなんて人から聞いただけだ。何もかもが足りない。もっと色々な事を知らないとな。

「リリィク、帰ったら魔法のことを詳しく教えてくれ。」

「……霧原、表情が少し変わりましたね。何か決心されたのですか？」

「まあ、そんなところだ。」

「ふふ、良い事です。では、魔法大会で優勝できるくらい厳しく教えていきますね。」

「お、お手柔らかにな……」

まずは魔法についてよく知ろう。魔法大会でいい結果が残せれば、

それだけ人々の期待に応える第一歩になるはずだ。優勝じゃなくてもいいとは思うんだが、それだけ彼女が期待してくれているということだろう。先に彼女の期待に応えるのも悪くはない。むしろ悪くないというよりもそうしたい。

そんなことを考えながらも一向は帰路を進む。ふと横を見れば水面がかすかに見える。守護龍の神殿は小島にあるわけだが、ここは川なのか海なのか気になった。だが、どんなに見回しても山らしきものは見えない。ふと機械人形に見せられた地図を思い出してみたが、この辺りに山はなかったはずだ。つまりここは海ということでいいんだろう。

「リリィク、ここって海なのか？」

「はい、そうですよ。……何か気になる所がありましたか？」

「いや、聞きたかっただけだ。」

「はあ、そうですか……」

暇だからどうでもいいことを考えていたなんて言えない。しばらくは黙って進もう……

しかし、ものすごく長い橋だ。行きの時と同じくらい考え事に没頭できればいいんだが、残念ながらそれは出来ない。帰ってからやることも決めたし、どうでもいい事だってすぐに思い浮かぶわけじゃない。思い浮かんでもどうでもいいから長く考え込むこともない。何故人というのはどうでもいい事にすら考えを及ぼそうとするのか？そもそも人の思考というものはどういう仕組みで動いているのか？お、いい感じだ。このまま似非哲学的なものにでも浸ってしまお

う。そもそも人というものが……

「……霧原、退屈なのですか？」

「え？うん、まあ……」

恥ずかしかった。すごく恥ずかしかった。気付かれないと思っていたが顔に出ていたらしい。周りの兵士たちも苦笑いしている。退屈そうな顔がどういうものだったか教えて欲しいくらい気になった。

「あまりお勧めしたくはないのですが、この魔道書でも読んで見ますか？」

リリィクがあの魔道書を差し出してくる。いつも持っているのだろうか？

「ああ、じゃあそうしようかな。」

「はい、熱中しすぎてこけたりしないでくださいね。」

魔道書を受け取るとほんのりと暖かい。よくよく考えてみれば彼女はローブの内側からこれを取り出した。そしていつも持っているということはこの温もりは……

「ありがとう気をつける。」

アホな事を考えるものじゃない。受け取った魔法書の温もりに浸る事はしばらく忘れて中身を見てみよう。

「ふむ……」

予想通りというかなんと言うか、見た事のある文字で書かれている。機械人形の所で名前を入力したときにリリィクが読めていたから予想はしていたが、この国で使われる言語や文字は俺のいた世界のものと同じ物のようだ。目次を一通り見てその流れで初級魔法のページを開こうとしてふと思い出す。あの時リリィクが見せたページはどこだったのだろう？あの時は確か文字が浮かび上がって見えていた。だがリリィクは、「見えますか？」と言っていた。つまり見えない事もあると言う事だ。そこから行き着く答えは白紙のページ。

ひたすらにページをめくった。そこを見ればまた魔道砲を撃てる気がした。今すぐ撃つつもりはないが、もしもの時に何か出来るかもしれないと思った。

「……あった……」

裏側のページに魔方陣のような物が描かれた白紙のページ。眺めているとうっすらと文字が浮かんでくる。あの時と同じ物だ。

「霧原っ！」

ふいに、リリィクの叫び声が魔道書に熱中していた俺の意識を引き戻した。その瞬間前方で多数の赤い飛沫が上がった。

「ソリ・アリです！橋まで逃げましょう！！」

いつの間にか橋を越えてしばらく進んだ場所まで来ていた。リリィクに手を引かれながら後方に向かって走る。兵士たちはその後を追う様に後退しているものの、あっという間にその数を減らしてい

た。

「姫様、お急ぎください！我々は既に半数近くが首を刎ねられました。全滅する前になんとしても姫様とユウト様は橋まで！！」

人が死ぬ。こんなにも多くの人がいとも簡単に死んでいく。

リリィクと俺を守るためだけに！

そうまでして守られるだけの価値が俺にあるのか？

いや、そうじゃない……

「ちくしょうっ！！」

俺はそう叫んで走った。俺に価値があるかとかそういうことじゃないんだ。この人達は守る事が任務なんだ。だから俺は生きなければいけない！確かに守る価値があったと言われるように！魔法をしっかり覚えよう。魔道砲も確実に撃てるようになろう。何も出来ない今の俺を悔しがる前に！！

「は、橋の上に来れば、襲って来ない、ということを、信じるしかないですね……」

こんなに走ったのはおそらく人生で初めてだろう。リリィクと半分以下になった護衛を見てソリ・アリに対して言いようのない恐怖が湧き上がって来た。

倒れた兵士たちはみな一撃で首を刎ねられていた。城への帰路は真っ赤に染まり、いくつもの死体が転がっている。

「ワイズマン隊長、報告をお願いします……」

「姫様、ご覧の通り護衛の半分以上の兵士が持っていかれました。我々ではアレに対抗する事は難しいようです。申し訳ありません……」

護衛隊のワイズマン隊長は悔しそうに下唇をかみ締めていた。どうやらここまで圧倒的だとは誰も予測できなかったようだ。

「き、来た……！」

一人の兵士が声を上げ近付いてくる人影を指差した。それに誘われるように皆の視線がその人影に集まる。

「あれがソリ・アリ……」

鼻と口を覆い隠すようにつけられたマフラーが長く尾を引いているのだけが異様に目に付いた。何故ならそれが真っ赤に染まってい

たから。

「赤いマフラー……いや、あれは……」

あれは布じゃない。マフラーの一部じゃない。いくつもの刃が連なって鞭の様になった、いわゆる蛇腹剣というものだろう。それが2本、マフラーに繋がりまるで生きているかのように蠢いている。

ソリ・アリはそれ以上近付いて来なかったが、何処かに逃げるという事もなかった。

「う、うわあああああああ！」

「バカヤロウ、戻れ！！」

「仲間が死んだんだ！じっとしてられるか！！」

兵士が一人、制止する仲間の声も聞かずに叫びながら突撃して行った。だが、橋から足が出た瞬間、その足を切り裂かれバランスを崩し前方へ倒れ込んだ。いや、倒れ込む前に全身を斬り裂かれ地面に落ちた。

「エーテル……ノ……臭イダ……ストラー……ノ……臭イ……」

ソリ・アリがそう言ったのをそこに居る誰もが聞いていた。

この世界で魔法を使うということは少なからずエーテルと反応するということだと守護龍が言っていたのを思い出した。そして、ストラーという名前も聞いた事がある。

「何故……ですか？何故こんなにも簡単に人の命を奪えるのですか！」

リリィクが叫んでソリ・アリを睨み付ける。

「強イ……エーテルノ臭イ！」

声に誘われてリリィクを見たソリ・アリは目を見開くと護衛の兵士たちの間を流れる水の様にぬらりとすり抜けリリィクの前に立った。

「橋の上に来るのか！？」

ワイズマン隊長の驚きの声に答える者はなく、ソリ・アリとリリィクは睨み合っている。

「何故、人を殺すのですか？」

「エーテルノ……臭イヲ断ツノダ……君ハ……トテモ強イ……エーテルノ臭イ……危険ダ……橋ニ……踏ミ入ッテデモ……断ツ必要ガアル……」

ソリ・アリの刃が動く！

「や、やめろぉぉぉっ！！」

リリィクが危ない！俺に出来るのは叫ぶことだけなのか！？いや、魔道砲がある！

白紙のページを開き、浮かび上がる文字を見る。右手をソリ・ア

リに向けて読み上げる！

「地を穿ち、天を焦がせ。我が手に宿りしは炎の息吹。紡ぎ出すは火炎の砲弾。」

「ム……違ウ臭イ！」

俺の声に気付いたのかそれとも別の理由なのかは分からない。ソリ・アリはこちらに向かって突撃してきた。

「焼き貫け、紅蓮の魔道砲！！」

……冷たい手が頬に触れる。ソリ・アリの手だ……

「私ノ……死臭ガスル……」

魔道砲は出なかった。

「ちくしょう、やっぱり俺なんかには……」

できない……

「君ハ……興味深イ……モット知リタイ……ガ……エーテルノ……臭イモスル……」

「霧原、もう一度魔道砲をお願いします！」

リリィクの声に答える気力が出ない。どうせ無理なんだとしか思えない。

「霧原、大丈夫です。私が付いています。」

リリィクの手が俺の手に添えられる。あの時と同じ……

「今なら撃てます。私を信じてください。」

優しい声。その声に導かれるようにもう一度読み上げる。

「地を穿ち、天を焦がせ。我が手に宿りしは炎の息吹。紡ぎ出すは火炎の砲弾。」

突き出した手の先に力が集まって来るのを感じる。そしてまたあの時と同じ様に読み進める自分の声にリリィクの声が重なって聞こえた。

「焼き貫け、紅蓮の魔道砲！！」

轟炎の柱がソリ・アリを呑み込む。護衛の兵士たちは二度目の読み上げが始まる前に既に正面から退避していた。一度目で撃てなくて良かったと思った。

「凄マジイ……ヤハリ……エーテルノ臭イハ……断タナケレバ……」

魔道砲の直撃を受けてもなおソリ・アリは立っていた。ただ、ダメージは確実にあるらしく衣服は所々が焼け焦げ、少し煤けた白い肌が見え隠れしている。

「私ノ死臭ヲ放ツ者……君ノ名ヲ知リタイ……私ハ……『ソリド・アリード』……固キ意志ノ上ニ立ツ者……サア……君ノ名ヲ……」

「霧原……勇人だ……」

情けない事に俺の声は震えていた。

「ユウト……次ニ……会ウ時ハ……ユックリト話ガ……シテミタイ……ソノ死臭ノ謎ヲ解クタメニ……」

「もうこれ以上人を殺さないと言うなら考える……」

「ソレハ……出来ナイ……エーテルノ臭イヲ……断チ……ストラーヲ断ツ……ソノ意思ガ……揺ラグ事ハ……ナイ……サヨウナラ……マタ会オウ……」

ソリ・アリ……いや、ソリドは踵をかえすと足を引きずりながら去っていった。誰も追いかける事はなかった。何よりも命が助かった安堵感が大きかったからだろう。

城に帰り着いたのはそれから半日ほど過ぎてからだった。報告を受けた王の顔がひどく落ち込んで見えたのが印象的だった。

日が明けてからすぐ、俺は魔法の訓練を受け始めた。何よりも力をつけたかった。守られるばかりじゃない、守れる人間になりたかったからだ。

日が暮れて、寝る前のちょっとした時間には書庫で伽の守人について調べた。元の世界に帰る方法も少しは調べておきたかったからだ。初めは一人だったが、途中からはリリィクも合流して一緒に調べてくれるようになった。もしかしたら、今はリリィクと二人きりになれるこの時間のためだけにここに来ているのかもしれないな……

ソリ・アリについても少し調べてみたが、有益な情報はなかったと言える。

「あの方は女性のようですね。破れた胸元から……その……見えていましたから……」

リリィクが少し恥ずかしそうに話してくれた事から女性だと言う事と、後はかなり古い書物に一部『アリード家』の名が出てきたくらいだった。そのアリード家はミズナという女性を最期にストラーによって滅ぼされたと書いてあった。ただそれだけしか書いていなかった。

ソリ・アリ……ソリドはエーテルの臭いを断ちストラーを断つと言っていたが、ストラーという人物は一体どれだけの人に恨まれるような事をしたのだろう？そして、未だに気を付けろと言われるというからには生きている可能性があると言う事なのだろうか？ならば、いつか出会ってしまう可能性も……？

そのストラーについては『恐ろしい存在』としか分からなかった。

だからだろうか？俺はそいつには絶対に会いたくないと思った。

気が付けば三ヶ月が過ぎ、剣の国・ガルマンドとの友好を喜ぶ歓迎式典まであと一月と迫っていた。俺は魔法大会でどれだけの成績が残せるだろうか？今は余計な事を考えず、そのことだけを考える事にした。

だが、一つだけどうしても考えてしまう事があった。

「霧原、貴方にだけは話しておきます……」

そう言ってリリィクが俺だけに話してくれた秘密。このことは絶対に誰にも話してはいけない。そう彼女と約束した。それがどれだけ重要な事か分かってしまったから、何故俺にだけ話してくれたのかが気になって仕方がなかった。

第三章　研ぎ澄まされた刃の音色

見えない糸を手繰り寄せ

絡め捕り

操り

幼稚な野望が開花する

第三章　研ぎ澄まされた刃の音色

「お疲れ様です。今日はここまでにしましょう。」

「おう、そうだな。」

リリィクとワイズマン隊長の言葉で今日の訓練が終わりを告げる。

「あ、ありがとうございました……」

ふぅ、とため息をつけば力が抜けて芝生に仰向けに倒れる。今日の訓練ははっきりいって異常だ。いや、単にきつかっただけなんだけど……

「ははっ、どうした少年？ソリ・アリから俺達を救ってくれた英雄が情けないぞ。」

と言いながらも汗をぬぐいながら隊長が俺の横にどさっと腰を下ろす。

「いや、今日のはさすがにきつかったですよ！」

今日の訓練は実戦形式だった。ただその内容が、防御魔法が得意で何故か剣術に長けるリリィクと戦いつつ、
護衛隊隊長を務めるワイズマンさんのなんかもう想像を絶するほどの強力な魔法を避けたり防いだりするというものだったのが唯一の問題だったと思う。

リリィクは幼い頃から剣の国の女王に剣術の手ほどきを受けていたそうだ。無駄のない、流れるような動きで迫ってくる細剣は、迷いなく命を奪いそうで恐ろしかった。なんとか避けて反撃しても、俺の放った魔法は彼女の障壁にいともたやすく阻まれてしまった。そこに隊長の放った魔法が飛んでくる。障壁で防いだはずなのにのけぞるほどの威力だ。体勢を立て直したところにリリィクの攻撃。これも障壁で防ごうとしたが、一瞬にしてかき消えてしまう。正直この二人は俺を殺そうとしているんじゃないかと思った。

王に聞いたところによると、リリィクは一度見た魔法を強制的に停止させる能力を持っているらしい。なんとも恐ろしい力だ。ただ、一度見るという条件は絶対らしく、初対面の相手の魔法は止められないそうだ。つまりリリィクと魔法で戦う場合には一撃で倒すしかないというわけだ。

そうなると強力な防御魔法が邪魔になる。今の俺は二人の熱烈なる指導のもと手を抜いたリリィクの障壁を辛うじて弾き飛ばすくらいの魔法は放てるようになったが、

全力で来る彼女に勝つには魔道砲でも撃たない限り無理だろう。もちろん撃ったら間違いなくリリィクが無事では済まなくなるから撃たない。

まあ、撃てないんだけど……

ただ、彼女は攻撃魔法を使えないそうだ。詳しくは教えてもらえなかったが、何かしらの制約があるらしい。それを補うための剣術なのだろう。

「しかし、少年は強くなったな。姫様と二人がかりで挑んだのに耐えきられてしまうとは、全くの予想外だぞ。」

「耐え切れなかったら死にそうだったんで頑張りました……」
「そうですね。少し本気になってしまいましたから、もしかしたら……」
「怖いことを言うな！」
はっきりいって君の剣が一番怖かったです。まったく、その細い腕のどこにあれだけの威圧感を出せる力があるんだか……
「ははははっ、無事でよかったな少年！」
笑い事じゃない……
「本当に強くなりましたね、霧原。魔法を一つ使えるようになる度に恥ずかしがっていたのが嘘のようです。」
恥ずかしがっていたのにはちゃんと理由がある。この世界の魔法は俺がゲームとかで知っている魔法とは若干違ったからだ。
まず、自分で使った状態をイメージできないといけない。魔法を放つために必要なエーテルとやらが使用者の描いたイメージを投影して初めて呼応してくれるらしい。
イメージするだけならば簡単なんだが、それが曖昧だとエーテルは寄ってくるだけで形を成さない。
そこで登場するのが呪文や魔法の名前だ。ここが一番のハードルだった。俺が知っている物語たちの中に出てくる魔法には決まった名前があり決まった呪文もあった。
この世界の魔法には決まったそれらがなかった。リリィクの持っている魔道書や書庫にある様々な魔法関係の本に名前や呪文が載って

いないわけじゃないが、
それらはあくまでこんな魔法がありましたよという例であって、それを唱えれば魔法が発動するわけじゃない。
昔の人たちはイメージを固めるための手段を探り、最良だと結論付けたのがこれらだったんだろう。実際やってみてそれは確かなんだろうと理解はできるが、
如何せん自分で考えた呪文や名前を披露するのはこの上なく恥ずかしかった……

「もう三ヶ月になるのですね。来月はもう魔法大会……。優勝、出来るといいですね。」

「この成長の速さです。少年ならやってくれますよ。な？」

「が、頑張ります！」

どうやら俺の成長は一般の人に比べて格段に速いそうだ。エーテルとの相性が良いからしい。確かに恥を捨て去ったころからポンポンと魔法を使える様にはなったが、いまいち実感はない。
それに、ポンポンといってもそれはレベル的には初心者が使うような威力の魔法であって、少し応用を利かせようとするとまだ自由に出せるとは言い難い。
なんにせよまだまだ訓練が必要ということだ。

「ん、だいぶ日が傾いてきたな。」

「そろそろ夕食の時間ですね。」

「ああ、行こうか」

今日の夕食は少し豪華だった。王は俺が二人を相手にして生き残った記念だと言っていた。ホント生きててよかったよ。

ただ、次の日の疲労は凄まじく、一日訓練を休むことになった…

…

第三章　研ぎ澄まされた刃の音色　2

「おや、ユウト君じゃないかい？よかったら見ていきなよ！」

「すみません急いでるので後で！」

「おっ、英雄君じゃないか。どうだい一杯。」

「ああ、じゃあ今晩酒場に行きます！」

「あー、まどうほうのおにいちゃんだ！あそんでー！」

「ごめんね、急いでるんだ！」

街の人々の声に応える余裕がない。それくらい急ぎの用事があるんだ。

別になんてことはない。いつものように街に行ったリリィクを王が呼んでいるだけなんだが、あの人がとんでもないことを言い始めたからこんなに急ぐことになった。

「あー、ユウト、ちょうどいいところに。リリに急ぎの用事があるから呼んできてくれ。

そうだな、俺が昼寝から起きるまでに連れてこれなかったら今日の夕食は見るだけな。

じゃ、おやすみ……」

ちょうどいいところにとか言いながらどう見ても待ち伏せていたくせに、言いたいことを言うとさっさと寝に行ってしまった。

冗談で言ったのかもしれないが、たまに本気でやらせるから質が悪い。急いで連れて行くに越したことはないだろう。

だが、リリィクの行き先に心当たりがあるわけじゃない。彼女は毎日みんなと触れ合うことを日課にしているが、行き先は気まぐれで心の赴くままにあっちにいたりこっちにいたりする。どうやらそういう部分は父親に似たんだろう。困ったものだ。まあ、大体は食べ物の所にいるわけだが……。

彼女はやたらと物を食べる。機械人形に会った時に何か理由があるというようなことは言っていたが、実際それが何なのかは知らない。知らなくても彼女を探す一つの手掛かりにはなるから今は気にしないでおこうと思う。

そんなわけで飲食店をめぐって走り回っているんだが、如何せん範囲が広すぎる。そして数も多すぎる。どうせ夕食の時間には必ず帰って来る、といってもそうなれば確実に王は起きているだろうから俺の夕食はただの見学会になり下がってしまうだろう。なんにせよ一刻も早く見つけて連れて行くしかないわけだ。

「姫様？今日は来てないねぇ。」

「そうですか……」

同じような事を繰り返しながらも捜索は続く。もう何件目だろうか？全く見つけられない。もしかしたら街の反対側かもしれないな。

「ゆっくり捜すか……」

いい加減走り回るのは疲れてきた。どうせなら見つけられなかった時用に食料を調達しつつ歩いて探すのもいいかな。

そう思って歩き始めてすぐのことだった。いや、もしかしたらずっとそうだったのかもしれない。

歩き出してゆっくり周りを見渡したことで気付けたんだろう。薄暗い路地裏からこちらをじっと窺っている人影を見つけた。

「冗談だろ……」

その人影には見覚えがあった。だが、こんなところまで来るとは正直想像してなかったから驚いた。

そいつは興味を持って近づいて来た犬や猫を長いマフラーから延びる蛇腹剣で地面を鳴らして威嚇していた。

「こんなところで何してるんだ……」

「お……う、ユウトに……会いに……来たのだ……」

ソリドだった。

「あれから……少し……人との話し方を……思い出したのだ……。ユウトに会って……それからなのだ……。」

初めて会った時よりは幾分か聞き取りやすい話し方で、一言一言確かめるように言葉を紡ぎ出す。

「君に……会えば……会って話を……すれば……また何か思い出せ

る……気がした……。だから……エーテルの……臭いを……断つことも……今は我慢……している……」

「それはいい心がけだが、前回その意思は揺らぐことがないとか言ってなかったか？」

「おう……人の考えというものは……たとえば水の流れのように……流れ、移ろい行くものなのだ……よ……」

どんな反応を見せるかと思ってからかってみたが、返ってきたのはなぜか自信満々の表情と声だった。

「また少し、話し方を……思い出したのだ……よ……。しかし……記憶は戻らない……。

あの橋を越えることも……前回の例外を除いて……できないのだよ……。

そして、心の奥底に刻まれた使命を……完全に抑えつけることも……

まだできない……のだよ……。」

気付けば蛇腹剣がカツカツと地面を突いている。その音が強くなると共に彼女の放つ威圧感が強くなってくるのを感じた。そう簡単に抑え込め続けられるものではないようだ。揺らぐことのない意思、それは俺には想像できないくらい強いものなんだろうな。

「くぅっ……これ以上は……無理……っ！」

不意に踵を返して走り出した。

「ソリドッ！」

後を追って走り出したが、手が届く寸前に彼女は地面を強く蹴って屋根の上に飛び乗ると、そのまま家々の上を駆けて行ってしまう。

「待ってくれ！」

追いつけるとは思っていなかったが、出来る限り追いかけようと思った。

が、それがいけなかった。

「きゃっ！」

「んごっ！」

路地裏から表通りへ飛び出した瞬間、女の子の声と俺の潰れたような声が辺りに響いた。そして、何かとてつもなく硬い物にぶつかって俺は地面に崩れ落ちた。

「ちょ、ちょっと！しっかりしてくださいませ！」

綺麗な桃色の髪をした女の子。その子の呼びかけもむなしく俺の意識は遠のいていくのだった……

第三章　研ぎ澄まされた刃の音色　3

なんだ？涼しいな。さっきまで走り回ってて体は暖かいを通り越して熱くなってた気がするんだが、何故か心地よい涼しさだ。まるで水辺にいて時々しぶきが当たるみたいなそんな心地よさだ。
そういえば城下町の中心部には大きな噴水があったな。よく人々が縁の部分に腰を下ろして談笑したり涼んだりしている憩いの場だ。

ああ、そうか、俺はいつの間にかそこで寝てたんだな。

そう納得しようとしてソリドに会ったのを思い出した。彼女を追いかけようとして飛び出したところで誰かにぶつかった……のは思い出したが、そこからどうなったんだ？
少なくとも噴水まで行った覚えはない。つまりは誰かが運んでくれたことになるな。

ひとまず起きようとして違和感に気付く。噴水の縁の部分は石を組み上げて造られていたはず。それなのに、何故か温かく柔らかい。それも頭の下だけだ。体の部分は石の冷たさと固さを伝えてくる。
ああ、何か前にあったなこういうこと。

この世界に来てすぐのことを思い出しながら恐る恐る目を開ける。

「あら、ようやくお目覚めですわね。」

綺麗な桃色の髪をした女の子が溌剌とした声で話しかけてくる。

「とりあえず起きてくださいまし。脚が痺れてしまいますわ。」

「あ、ああ……」

体を起こすと噴水が見える。

「ふぅ、やれやれですわ。いきなり飛び出して来たかと思えば、思いっきり剣にぶつかって気を失うなんて、
ぶつかられたわたくしの方が驚いてしまいますわ。」

立ち上がってからかう様な笑顔を浮かべてこちらを見てくる。身長は俺の顎の辺りまでしかない小柄な少女だ。
全体的に幼い印象だが、なにかしら気品のようなものを感じさせる。言葉使いからしてどこかのお嬢様とかかもしれないな。

「ごめん、今度から飛び出さないように気を付ける。」

「ええ、そうしてくださいまし。でも、魔道砲の英雄を介抱するのも悪くない経験でしたわ。」

どこの誰だか分らない人にまで知られているのか俺って……

「ふふ、わたくしはユリアル、『ユリアル・ガルマンド』。魔法剣士をやっておりますわ。
以後お見知り置きを……」

ぺこりとお辞儀をする。

「ああ、よろしく。……あれ、ガルマンドって……」

たしか西天の……

「ええ、わたくしカルメア・ガルマンド女王の娘ですわ。式典まで日にちはありますけれど、それに先立っての訪問、ということになっておりますの。

……と、いうわけですので、良ければ案内してくださいませ。」

「ああ、案内くらいならお安い御用だが……お忍びとかじゃないのか？」

一国の王の娘が他国を歩き回るというのはいささか問題があるように思えたんだが、どうやら彼女にとってはそうでもないらしい。

「ご心配無用ですわ。わたくしこの国にはよく遊びに来ておりますもの。

それに、この剣を持っている限り嫌でも目立ってしまいますわ。」

彼女が視線を足元に向ける。それを追うと彼女が持つには不釣り合いな大きさの剣があった。

彼女の身長とほぼ同じくらいの大きさをした剣、これをどうやって持つというのだろう。

「剛剣、背装……」

疑問を口にする前に呪文が唱えられ、剣は彼女の背中に吸い付けられる様に装着された。なるほど、これが魔法剣士の能力の一端か。

「魔法のおかげでこの剣を持つことができますの。さ、早く案内してくださいまし。」

「ああ……と言いたいところだが、何処に案内すればいいんだ？」

そもそもこの国にはよく遊びに来ると言っていたし、実は案内なんていらないんじゃないか？

「リリィクお姉様の所ですわ。」

「あー、今ちょうど探してるところだ。一緒に探そうか。」

「あら、散策の時間でしたのね。仕方ありませんわね、一緒に探しましょう。」

どうやらリリィクがよく街をふらついていることは知っているらしい。説明する手間が省けるのはいいことだ。

しかし、大きな剣だ。いやでも人々の視線を集めてしまう。ついでに二人とも有名人だから困る。

よく遊びに来ているだけあってユリアルのことはみんなが知っているようだし、ものすごくフレンドリィに声をかけてくる。そのついでに俺にも声がかけられる。

「おや、ガルマンドのお姫様とデートかい？やるねぇ。」

「いや、そんなのじゃないです！」

「あら、私とご一緒なのがお嫌ですの？」

「そういうことじゃない……」

すれ違う人に冷やかされるのが一番多かった気がする。

そういえば機械人形が「カルメア女王の代になってからは交流が増えた」と言っていたが、こうやってユリアルと肩を並べて歩いているのは実は彼女たちの努力のおかげなんじゃないだろうか？もしやそれ以前は……

「あら、別に敵対していたわけじゃありませんわ。ただ交流がなかっただけですわ。」

「……まだ何もしゃべってないんだけど……」

「顔に出てますわ。」

俺の顔は万能だな。口を開かずとも自分の心情や相手に聞きたいことを伝えてくれるらしい。

「……なんか納得いかないけど納得いったよ」

「それは良かったですわ。」

お互いよく分らない感じで分かったことにしたんだと思う。そのままお互いの国のことを話しながらリリィクを探した。

リリィクはすぐに見つかった。案の定お食事中だった。王が呼んでいると伝えると渋々食事を中断してついて来た。

両手に花だとか冷やかされながらの帰りの道中、リリィクとユリアルは終始楽しそうに会話をしていた。
どうやらユリアルはリリィクのことを実の姉のように慕っているらしい。リリィクもユリアルを妹のように可愛がっているような印象だった。

仲のいい二人を羨ましく思いながら王からの任務を終えた俺は夕食にありつける喜びをかみしめていた。

とりあえず考え事が顔に出る癖は何とか治したいと思った。

第三章　研ぎ澄まされた刃の音色　4

「お疲れ様です。今日はここまでにしましょう。」

「おう、そうだな。」

「お疲れ様、ですわ。」

俺は死ぬんだ。今日の訓練では本気でそう思った。リリィクとワイズマン隊長だけなら死ぬかと思ったで済ませられていたが、そこにユリアルが加わったことによって俺の死はよりリアルに目の前に突きつけられる形になっていた。

「あ、あり……がとう……ございまし……た……」

息も絶え絶えの状態で近くの木に寄りかかった。……が、ボリッという音とともに折れた。

「勘弁してくれ……」

ユリアルが力任せに剣を振り回した結果、周囲の地面はいたる所が抉れ、多くの木は倒れていた。俺が寄りかかった木も例外ではなかったらしく、無様にも一緒に倒れることになった。

ユリアルは何も考えなしに突撃してくるタイプだ。周囲の被害は大きいが、避けることは容易かった。

問題はそれを考慮して攻撃してくるリリィクとワイズマン隊長だった。ユリアルの大振りの攻撃を避けたところに飛んでくる攻撃魔法

やリリィクの攻撃、あるいはその両方。
今の俺では間違いなく防ぎきれない。そう考えて以前から練習していた加速の魔法をフルに使って回避し続けた。その甲斐あって命を繋ぎ止めることはできたが、
代償として未だかつてない疲労が襲ってきた。

「まあ、情けないですわね。」

もう何もしゃべりたくない。そう思って仰向けになって空を見た。
もう日が暮れかかっている。夕日が目に染みるとはこういうことなんだろうか？
そんなどうでもいいことを考えたいくらい疲れていた。

「隣、失礼しますね。」

そう言いながらリリィクが隣に腰を下ろす。金色の髪がさらさらと揺れている。

「あれ、二人は？」

「先に戻るそうです。聞いていなかったのですか？」

一瞬でも寝てたんだろうか？ワイズマン隊長とユリアルの姿が城の中に消えるのだけが見えた。

「……いよいよ、明後日ですね。」

「そうだな……」

そう、もう魔法大会はすぐそこに迫っているのだ。俺はいったい

どれくらい強くなれたんだろうか？その答えがもうすぐ出るわけだ。

「……俺、頑張るよ。」

「……どのくらいですか？」

「……できる限りさ……」

「ふふ、期待しています」

綺麗な青い瞳が俺を見つめてほほ笑んでいた。少し気恥ずかしくて目を逸らしたくなったが、こらえてじっと見つめてみた。

「まっすぐな瞳ですね。霧原はいつもまっすぐで、寄り道をすれば私が置いて行かれそうです」

「いきなりなんだよ。」

「……私にもよく分りません。ただ、何となくそう思ったのです。」

「そうか……」

彼女が目を逸らしてしまった。仕方なく空を見る。きれいな夕暮れだ。

「霧原、もう少しこうしていたのですが、今日は『ティアドロップの夜』です。

月の光が出る前に戻りましょう。」

ティアドロップの夜、それは天に浮かぶ月から恐ろしい光が降り

注ぐ日のことだ。なんでもその光に触れた生物が二つ以上であれば融合してしまうのだという。
何故そんな現象が起きるのか、月に居るという『衛星の守護者』にも原因が分からないらしい。

守護龍の話にもあったように、衛星の守護者は星啜りを追って月に乗りやって来たそうだ。書庫にあった古い書物によれば、そもそもこの月は星啜りが暴走した際のカウンターとして製作されていたらしい。
しかし、この星に飛来した際に何者かの侵入を受け、装備されていた衛星砲のプログラムを大幅に書き換えられてしまったそうだ。その結果が今のティアドロップの夜なのだという。

「書き換えた人物はおそらくストラー、か……」

「月の話ですか？」

「ああ。それにストラーの名前は月に限らず何かにつけて出てくる名前でもあるし気になるんだ」

「機を見て潜み、全てを災厄に落とす者……
もしかしたら、今の時代にもまだ生きているのかもしれません。」

「機械人形が気を付けろと言っていたしな。」

衛星の守護者は今でも対処プログラムの作成に追われているそうだ。だが、現時点でできることはティアドロップ照射地点の割り出しだけ……。
管理者にも崩せないプログラムを作り上げるストラーという人物の恐ろしさを考えると、改めて、会いたくはないなと思ってしまった。

「さあ、早く戻りましょう霧原。」

「そうだな。」

これまでにも何度かティアドロップの夜を経験して分かったこと、それは彼女がこの日を嫌っているということくらいだ。

毎回のようにこの日が来るといつもより少し落ち着きがなくなる。そして、夜はいつもより早くに眠ってしまう。当然書庫で調べ物をする時間も少ない。

さらにその少ない時間が終わりに近づくにつれてイライラしているのが目に見えて分かるようになる。理由は聞けなかった。

いや、一度何故イライラしているのか聞いたが……

「いいえ、気のせいです！」

の一言で一蹴されてしまった。よほど触れられたくないことなんだろう。

「さあ、霧原！」

急かされながら後を付いて城に戻る。

彼女がこの日を嫌う理由はそれほど遠くない未来に知ることができた。

お互いに知りたい知らせたいと思ったわけではなかったが……

第三章　研ぎ澄まされた刃の音色　5

「霧原、貴方しかいないのです。お願いできますか？」

リリィクにそう言われたのは今朝のこと。

何の話かといえば今晩開かれる歓迎式典前夜の晩餐会で行われるダンスにおいて、

俺に彼女のラストダンスの相手を務めてほしいということだった。

「……少し考えさせてくれないか？」

「はい、ラストダンス直前までは待ちます。でも、それまでに答えがいただけなかったら、

強引に腕を引っ張ってでも踊らせますから……」

俺が嫌だと答えなければ確実に踊らされるわけだ。

しかし、彼女はどうしてこんなにも俺と一緒にいようとしてくれるんだろう？

一目惚れしてしまった俺からしてみればこの上なく嬉しい状況のはずだが、何故か腑に落ちない。

もしかして彼女も俺に一目惚れを！？

そんな考えさえ浮かんでくるが、何か違和感がある。

来訪者だから親切にしてくれてるわけでもないようだ。現に龍弥には声をかけることすらしない。話題にすることすらない。

「ストマ大臣には気を付けて下さい。

リュウヤさんのように引き込まれては戻れる保障はありませんから……」

不意に彼女の言葉を思い出す。もし俺もそのストマ大臣とやらに引き込まれていたら、
今こんな風に話すことすらできないのかもしれないな。
ん？つまり彼女は俺が来訪者で且つストマ大臣に引き込まれていないから話しかけてくれるのであって、決して好意からではなく……
いかん、それは悲しすぎる。
そもそもそれだけの理由でラストダンスの相手に選んでくれるはずがない。そう信じたい。
そもそもラストダンスというのは……

「また考え事ですの？」

「ひょっ！？」

どうやら悩みながらひたすらウロウロしていたらしい。
突然ユリアルに声をかけられて変な声が出てしまった。

「まったく、お姉様のラストダンスに誘われただけで悩みすぎですわ。

それではお姉様に対して失礼ですわよ」

「もしかして顔に出てたか？」

「いいえ、お姉様から聞きましたわ。『ユウトを悩ませてしまうとは思いませんでした』と、
落ち込んでいましたもの。」

「いや、だって俺なんかが受けていいものか……」

そう答えながら違和感。……ユウト？

「お姉様がそうしたいと願っているのですわ。お兄様が悩む必要はございません。

さっさとＯＫの返事をしに行きなさいまし。」

その違和感を上書きされた。

「なんだよお兄様って！？」

「わたくしがそう呼びたいだけですわ。気にしないでくださいまし。」

いや、気になる。気になりすぎる。確かに妹がほしいと思ったことはあったけれども、

これは唐突過ぎる。

「あら、そういう趣味がおありですの？ちょっと距離を置こうかしら……」

「ああ、こういうのは顔に出るのね……」

「ええ、ばっちり、ですわ。」

やはり俺の顔は万能の会話機だな。正直いらない機能だと思うが……

「ほら、さっさとお行きなさいまし。お姉さまは……うん、何処かにいらっしゃいますわ。
御自分でお捜しなさいまし。」
「……まさか散策に？」
「ええ、いつも通り……」
また飲食店巡りか……
「仕方ない、捜すか……」
街に向かおうと一歩踏み出した。その時……
「あら、仕方ない、だとあの子は悲しむわね。」
不意に声をかけられた。声のした方を向くと一人の女性が立っていた。
黒の長いポニーテールに、黒に紫のヒラヒラがついたドレスを着た女性だ。
腰には二本の剣を携えている。
「あの子は貴方を選んだのよ。仕方ない、では駄目。しっかりと決心してから行きなさい。
ユリアル、無駄にけしかけては駄目よ。考える時間も重要だと覚えておきなさい。」
赤い瞳と落ち着いた話し方に引き込まれてしまう。リリィクみたいに何か不思議な魅力がある。

「お母様！」

「え……ええっ！？」

俺は自分の耳と目を疑った。ユリアルの母親といえば、剣の国・ガルマンドの女王
『カルメア・ガルマンド』であるわけで……。で、確かユリアルともう一人お子さんがいるわけで……。
いや、それにしてはものすごく若く見えるわけで……。それはもうリリィクあたりと
同年代に見えるわけで……

「ふふ、ありがとう……。褒めているのよね？」

その瞬間、俺は自分の顔を潰したくなった。

「え、ええ、大変お若く見える……うん、失礼を承知で聞きます。

本当にカルメア女王ですか？」

聞かずにはいられなかった。失礼なのは重々承知だが、この容姿でユリアルとさらに
その兄を産んでいるとは到底思えなかった。

「お兄様！」

「良いのよユリアル。この外見では貴方が疑問を抱くのも当然だと思うけど、
それでも私は私。間違いなくカルメア・ガルマンドよ。」

「大変失礼しました。」

俺は片膝をついて頭を下げた。今のは結構な失言だ。相手が悪かったら命すら危うかったかもしれない。自分で「この外見」と言えるほどに彼女自身でも疑問を持っているに違いない。そういったことに関して安易に質問すべきじゃなかったな。

「気にしないで、キリハラ　ユウト。疑問をぶつけることは決して悪いことじゃないわ。

そうね、いつか時が来たら貴方にもこの身体の秘密を話すと約束しましょう。それで良いかしら？」

「……はい。本当にすみませんでした……」

「ふふ、さあ、立って。」

そう言って差し出された手を取って立ち上がる。不意に母親が恋しくなった。

「さあ、リリィクを捜しに行きなさい。あの子は一途なのよ……早く行ってあげなさい。」

全てを包み込むような優しさと、そんな中にも厳しさが顔をのぞかせる。

きっとこれが母親なんだろうな。

「はい、失礼します！」

踵を返して駆けだした時には、もうリリィクのことしか考えないようにした。
彼女に誘ってもらえて嬉しかった。ただそれだけじゃないか。それでいいじゃないか。

でも、何故彼女は俺を……？

その疑問だけはどうしても拭えなかった。

「行ったわね……」

「……お母様、一つだけ聞いてもよろしいですか？」

「何かしら？」

「どうしてお姉さまはお兄様をあんなにも慕っているのですか？それにお兄様も……」

「……ユリアル、貴方には話してもいい頃ね。この話誰にも……特にユウトには決して話してはいけないわ。良いわね。」

「……はい。」

「……あの子と……リリィクとユウトは幼い頃に出会ったことがあるのよ。」

第三章　研ぎ澄まされた刃の音色　6

「リリィク、君はなんで俺なんかを……」

「……それは……貴方が思い出してくれるまで待ってください……」

よくわからない答えだった。

ともかくラストダンスの相手は俺に決まった。今はその喜びを噛み締めつつ薄暗い書庫で一人寂しくダンスの練習をやっている。ただの大学生だった俺にダンスなど踊れるわけがない。書棚から引っ張り出したダンスの教本を見ながら暗がりでトントンと……

「寂しいわね……」

「……言うな……」

珍しい客人がやってきた。

「地下から出てくるなんて奇跡だな。」

「あら、失礼ね。私だって外くらい出れるわ。馬鹿にしないで頂戴。」

機械人形だ。

「あなたがここで一人寂しくダンスの練習をしていると聞いて見物に来たのよ。」

「誰から聞いたんだよ。」

「ガルオムよ。書庫を覗いたらあなたが必至こいて練習してた！と、とても楽しそうだったわ。」

王、ああ王よ、貴方はなんという人だ。きっと今頃思い出し笑いで腹を抱えているに違いない。

「しかし、無様なダンスね。それじゃ恥をかくわね、間違いなく。」

「だから練習してるんだよ……」

かといって上達しているとは思えない。このままではまずい。

「そうね、私が練習相手になってもいいわ。一人では感覚も掴めないでしょう？

これでも淑女の嗜みとしてダンスの相手をしたことはあるから安心しなさい。」

そう言ってズカズカと近付いて来ると強引に手を取った。

「背、低……うぐっ！」

言い終わらないうちに足を踏みつけられた。

「あなた、ダウンサイジングした体を作ってほしいの？ん？」

「ごめんなさいもう言いません。」

しかし、本当に背が低い。間違いなくユリアルより低い。なんでも動きの効率上サイズは小さい方が良いらしい。

「……そういえば、あなたは陽の守の出身だったね。」

「ああ、そうだけど。」

「私の友人に陽の守のお菓子を好きな子がいたわ。」

「へえ……」

「その子は今、記憶を無くして彷徨っているわ。」

「……なあ、それって……」

「伽の守人よ。」

記憶を無くして、記憶の手掛かりを求めて、他人を巻き込みながらその方法を模索している、
俺たちがこの世界に来ることになった元凶……

「……そうか……」

「あの子は今、他人の記憶を読み取って自分との繋がりを探そうとしているわ。
出会ったらまず記憶を読み取ってくるはずだから気を付けなさい。

」

「対処法があるのか？」

「大事な記憶、人に知られたくない記憶は心の奥底に隠しなさい。」

「ずいぶんと大雑把だな。」

「そんなものよ。意志の強さで押し込むしかないわ。」

押し込むってどんなだよ……

「……ふぅ、まだまだね。晩餐会までまだ時間はあるわ。ギリギリまでやるわよ。」

「……はあ、はいは……あがっ！」

「あなたの為にやっているのよ。やる気を見せて頂戴。」

「はい、頑張ります！」

その後も何度も足を踏みつけられながら時間ギリギリまで練習した。

なんとか無様な姿をさらさないレベルまではいけたと思うから一応感謝しとこう。

第三章　研ぎ澄まされた刃の音色　7

「ん？迷子かな？」

晩餐館の会場へ向かう途中オドオドと周りを見回しながら歩いている少年を見つけた

「どうしたんだ？もしかしてガルマンドの関係者？」

声をかけるとビクッと体を跳ねさせてこちらを向いた。
どこかで見たような顔だがこの国の人間ではないようだ。

「会場に行くなら一緒に行こうか？」

言葉では答えず首を横に振って答えると、俺の後ろに何かを見つけたのか走り抜けていった。

「なんだったんだ？」

走り去っていく少年を目で追って、その先にいた人物を見て目を疑った。

「ストマ大臣……！」

大臣はこちらに気付くとローブの奥で不敵にニヤリと笑い、少年を連れて通路の奥へと姿を消した。
何とも言い難い恐怖のようなものを感じて体が震えた。

第三章　研ぎ澄まされた刃の音色　8

もうすぐ晩餐会が始まる。ガルオム王やカルメア女王、リリィクにユリアルに機械人形等々
両国のお偉いさんが並んでいる。

「機械人形も要人扱いになるんだな。」

失礼なことを口に出して考えながら眺めていた。とりあえずいつものローブ姿じゃない、
ドレス姿のリリィクはとても綺麗だと思った。

「えー、挨拶とかめんどくさいんだけど……」

「ガルオム、王である貴方がしっかりしなくてどうするの。」

「あー、明日ちゃんとした挨拶するから今日は飲めや踊れやで大騒ぎしてくれ！
以上！挨拶終わり！！」

「父上っ！」

「この大馬鹿者っ！」

「うごぇっ……」

……そんなこんなで晩餐会が始まった。カルメア女王・リリィク・機械人形に

壮絶なつっこみをされる王を見て誰しもが「うん、いつも通りだ」と笑った。

しかし、こんな催しに参加するのは初めてだ。面白いくらい何をすればいいのかわからない。

「おう、少年、戸惑っているな。」

ワイズマン隊長が通りすがりに背中をバンバン叩いてくる。

「あはは、こんなのに参加したことなくて……」

「緊張することないぞ。ほら、ガルオム王を見てみろ。」

……寝ている。立ったまま寝ている。

「気持ちよさそうですね。」

「ああ、いつも通りだ。お、そろそろ姫様が動くぞ。」

リリィクが挨拶回りの道すがら、流れるような動きで魔道書を取り出し王の頭に放り投げた。

「うごっ！」

そして何事もなかったかのようにさっと魔道書を拾い上げあいさつ回りに戻って行った。

なんでこんな時にまで魔道書を持参してるんだろうという疑問は心の奥にしまった。

「あそこまでリラックスしろとは言えないが、もう少し肩の力を抜け。この場じゃ損するだけだぞ。」

隊長は来た時の様に背中をバンバン叩きながら去って行った。どうやらもう酔っているみたいだ。

とりあえず目の前にある料理を食べながら会場全体を見渡してみる。みんな楽しそうだ。

「姫、ラストダンスが駄目ならせめて一番最初に僕と踊ってくれないかい。」

「すみません、ゼオ。私、ラストダンス以外は踊るつもりはありません。」

オーケストラ隊がダンスの曲の演奏準備を始めたあたりで妙にキザっぽい男がリリィクに絡んでいるのが見えた。

「おお麗しの姫よ、そんなこと言わずに。僕と踊れば気持ちも変わるかもしれないじゃないか！」

なんだこいつ。

「ああ、また始まったよ。」

「バスラ・ゼオのリリィク姫口説きか。」

「姫はああいうキザな奴が嫌いなのにな」

「ユリアル姫の護衛だなんだと足繁く通ってる割には冷たくあしら

われてるよね。」

「まったく、レイピアの腕では並び立つ者が無いと言われているのに、あれじゃあ台無しよ。」

お互いの国で有名になるくらいの男らしい。良い意味でも悪い意味でも。

「おお、そんなに冷たくしないで。さあ、恥ずかしがらずに……」

「恥ずかしいのは貴方です。失礼します。」

「ああ、行かないで美しき……む！？」

リリィクが去り際にチラリとこちらを見て手を振ったのをバスラ・ゼオとやらは見逃さなかった。

ずんずんとこっちに向かってくる。正直関わり合いになりたくない。

「そうか、君が噂のキリハラ・ユウト！僕の姫に手をだすとは恥知らずな奴め！」

「恥ずかしいのはお前だ。じゃあな。」

リリィクの真似をして立ち去ろうとしたが肩をがっちりつかまれてしまった。

「ちょっと待ちたまえ。ポッと出の庶民が僕の姫のラストダンスの相手なんて納得いかない。

僕と勝負だ！君が負けたら僕にラストダンスの権利を……」

「バスラ・ゼオ。」

奴の後ろからリリィクの冷たい声が聞こえた。これは相当怒ってるぞ。

「私が小さい頃何と呼ばれていたか知っているでしょう？これ以上勇人を困らせることがあれば、
誰とも口もきけなくしてしまいますよ。」

「うぐっ、すみませんでした……」
ひどくうなだれて去って行った。彼女が小さい頃なんて呼ばれてかも気になるが、
それ以上に気になることがあった。今彼女は俺のことを……

「申し訳ありません、霧原。あの人も悪い人ではないのですが……」

「あ、ああ、そうなのか……」

俺の気のせいだったのか？そう呼ばれたいと思う心が聞かせた幻聴だというのか！

「霧原、ラストダンス、楽しみにしています。」

リリィクは微笑んで去って行った。正直それだけで他のことはどうでもよくなった。

「うむむ、羨ましい、羨ましいぞキリハラ・ユウト。ここはひとつお互いのことを
よく知ろうじゃないか。そう、まずは敵のことを知るべきなんだ！まずは僕から！

僕の名前は『バスラ・ゼオ』。剣の国ガルマンドではレイピアを最も上手く扱える者
として知れ渡っている！」

そして、リリィクを追い掛け回していることでも有名である、と。

「む、何か失礼なことを考えているね？まあいい、さあ、次は君のことを教えてくれたまえ！
さあ！さあさあ！！」

限りなくうざいんだけど……。っていうかいつの間に戻ってきてたんだ？まあいいか、
正直時間も持て余してるし付き合ってやるか。

「霧原勇人、魔道砲使い、リリィクのラストダンスの相手になってます。」

「……君は僕をバカにしているのかい？」

「ああ、そのつもり。」

拳を握り締めてわなわなと震えている。この反応を見るに、プライドは相当高いらしい。

「もう許さないぞユウト！僕は誰が何と言おうと君に勝負を……」

言い終わるか終らないか、その出来事は突然起こった。

「何だ！？」

ガラスの砕ける音、一呼吸置いてバルコニー側に居た人達が一斉にこっち側に押し寄せてくる。

「リリィク！」

「はい、ここに居ます！」

リリィクが人込みをかき分けて駆けてくる。彼女の無事を確認して安心した直後、声が上がった。

「ソ、ソリ・アリだっ！」

「は、早く逃げろぉっ！」

人々の混乱がますます大きくなる。無差別殺人鬼が飛び込んできたんだから人々の反応は
当然のものだ。俺には納得いかないが……

「霧原、行きましょう！」

そう言って彼女が指さしたのは出口ではない。

「ソリドの所に行くんだな？」

「はい。」

きっと彼女は俺の心を汲み取ってくれたんだろう。俺に会ってから彼女が変わってきていることも
知っているから、俺が行かなくてはならないんだと、そう言ってくれているんだ。

「ちょっと待ってよ。ソリ・アリってあのソリ・アリなんだろう？そんな危険なところに
姫を連れていくっていうのかい！？」

「行かなければなりません。もし本当に彼女なら霧原が行かないとまともな話はできないかも
しれませんから。」

「だったらユウト一人で行けばいいんじゃないかい？何も姫が一緒に行くことなんて……」

「霧原が行くのなら私も行かなければなりません！」

言葉を遮るようにリリィクが怒鳴った。あまりの剣幕にゼオが言葉を飲み込んだだけでなく、
周囲も静まり返ってしまった。

「う……おう、ユ……ウト……ユウト……早く……逃げるのだよ！」

ボロボロになっているソリドが立ち上がってこちらに歩いて来る。だが、それを遮るように小さな影が立ちふさがった。

「ユリアル、何を……！？」

「……」

リリィクの声に耳を貸さず、彼女は背中に装着している大剣に手をかけると、
無言でそれをソリドに叩き付けた。正確には斬り付けたと言うべき

なんだろうが、
彼女の剣はあまりにも大きく叩き付けたという方が正しく思えた。
一方ソリドは
蛇腹剣を絡ませて辛うじて剣を止めていた。しかし、その衝撃は凄まじく、
周囲の床に亀裂が走るほどだった。

「う、ぐぅ……この……娘も……操られて……！？ユウトだけじゃない……みんな……
皆逃げるのだよ！」

ソリドの叫びで我に返った人々が我先にと出口へ殺到する。

「くそっ、少し荒っぽいが仕方ねぇっ！」

そう言って王が出口側の壁の前に立った。

「壁の向こうにいる奴らも聞こえるな！？しっかり下がってろよ！！」

王の力強い声に辺りが再び静まり返る。

「耳を塞いでください！」

リリィクの声にハッとしたように全ての人たちが耳を塞いだ。

「霧原も早く！」

何が何だかわからなかったが俺も耳を塞いだ。ソリドは器用に蛇腹剣で耳を塞いでいた。

「我が咆哮は全てを平伏す獅子の咆哮！震え、砕け、破壊を紡げ！デストロイ・ハウル！」

王が呪文の詠唱を終え一気に息を吸い込む。そして一気に吐き出すように咆哮した。

全身がビリビリと震えるほどの凄まじい音量。正面にあった壁は耐えきれずに崩れ去った。

「女性や体の弱い奴らはこっちからだ。バスラ・ゼオ、誘導してくれ！」

ゼオは無言で頷き駆けて行った。

「よし、男たちはバルコニーに走れ！緊急用のラダーがある。そっちを使って……」

不意に王の言葉が途切れた。そして、誰もが王の方を見て戦慄した。

「カルメア様……どうして……」

リリィクの顔が驚きと戸惑いで青ざめる。俺にも信じられない。

王の言葉が途切れたのはカルメア女王が剣を突き刺したからだっ

た。

「カルメア……そうか、俺たちは遅すぎたんだな……そうなんだろう、ストマ！！」

その問いに答えるように床に魔法陣が出現した。魔道書に乗っていた転移の魔法のようだ。

そこから現れたのは不敵な笑みを湛えたストマ大臣……

「ククク、ウククク、いやいや、先に剣の国を支配するのは容易かったぞ。

何せ素敵な協力者がいたからなぁ。」

「傀儡の魔法か、えげつねぇな。」

王は気丈に振る舞っているものの、剣の突き刺さっている場所が非常にまずい。

心臓の位置だ。

「そうだ、ストラー様が掛けてくださったのだ！いや、正しくは新しくストラー様と

なった御方だなぁ。」

そこに大臣の後を追うように魔法陣から人が現れた。

「そんな……嘘でしょう……」

「ちっ、冗談だと言ってほしいもんだな……」

それは会場に向かう前に見かけた少年だった。

「さあ、ストラー様、あなたの望む世界を作るため、その手始めとしてこの国を掌握しましょうぞ！」

「ぼ、僕が……せ、世界を手に入れるんだ……」

「さあ、さあ！その男に刺さっている剣を抜くのです！」

その言葉に促されるようにカルメア女王が剣を手放し少年が柄を握る。

「ぼ、僕が！」

少年は一気に剣を引き抜いた。

「くそっ……」

王の胸から鮮血が溢れ辺りを赤く染めていく。そしてその体は力なく地面に倒れ伏した。

「やった！やったぞ！！カルメアを封じガルオムの息の根を止めたぞ！

これで後は『ウルリット・スピアラ』の娘、お前を殺し、カルメアと子供たちを殺せば

復讐は完了だなぁ。」

フードを脱ぎニヤニヤと笑いながらリリィクの方を見る。

「何故母の名を……貴方は一体……」

「この男なら答えてくるかもなぁ？まあ、傷を癒せるような奇跡の魔法でも使える奴が
ここにいればまだ間に合うかもなぁ？ウククク、守護龍の娘以外にそんなことができる奴が
いるかなぁ？呼びに行くか？間に合わないだろうなぁ、ククククク。」

「さあ、どうかしら？ねえ、ソリド？」

今まで黙っていた機械人形が不敵な笑みを浮かべて何故かソリドを見ている。

「貴女になら分かるんじゃないかしら？」

ソリドは剣を支えたまま機械人形を見、目を見開いた。

「あ……ああ……ストラーと……同じ臭いなのだよ！」

「少しは思い出せたかしら、貴女のこと。」

「お嬢さん、通してもらうのだよ。少し痛い思いをするのは勘弁してほしいものだね！」

そう言ってユリアルを指さす。それと同時に彼女の正面を埋め尽くすほどの大小様々な
魔法陣が出現した。

「轟流、撃ち抜き潰せ！ジェットブラスターッ！！」

彼女が叫ぶと同時にすべての魔法陣から凄まじい勢いの水流がユ

リアルに向かって放たれた。
一瞬障壁で弾いたように見えたが、あまりの勢いに耐え切れずソリドに絡め捕られていた剣から
手が離れ遥か後方の壁に叩き付けられ意識を失ったようだ。
ソリドは奪った剣を放り投げると機械人形の所へ駆け寄った。そして、迷いなく二つの蛇腹剣を
突き刺した。

「お見事。でも私は……ストラーじゃない……わ……」

「機械人形！」

剣を引き抜かれると同時にその体が力なく床に崩れ落ちる。

「臭いが移った……上から！」

ソリドが天井を見上げる。同時に機械人形が天井を突き破り降り立った。

「替えの身体は作っておくものね。戦闘用に改良したものよ。少し遊ばないかしら、ソリド？」

「……水を使えること、今思い出せたのはこれだけなのだよ。」

倒れて動かなくなった方の機械人形からずるりと剣を引き抜くと、降りてきた機械人形のもとへと近付いた。だが、ある程度の距離を保って足を止めた。

「ユウト、もう手遅れかもしれないのだよ。本当は君を手助けするためにここに来たのだけれど、

君よりも強い記憶の臭いを感じてしまったのだよ。」

「ソリド……。」

「それに、その男、ガルオムの臭いが嫌いなのだよ。きっとエーテルに好かれすぎているのだね。」

ふっと振り返り王を指さして言う。王の手が動いた気がした。

「……はっ！おのれ、カルメア、もう一度その男を……」

一瞬誰よりも早く大臣が我に返ったが、その言葉に応えたのはカルメア女王ではなく

ガルオム王の咆哮だった。その衝撃で大臣も女王も少年も吹き飛ばされた。

立ち上がった王の胸の傷は塞がっていた。

「そうか、お前もウルリットと同じ……！」

「くっそ痛かったぞ。それにお前の顔、忘れるわけがない！」

王が何かを指で弾いてリリィクに渡した。それは小さなブローチだった。

「それはスピアラの紋章、リリ、お前の母さん、ウルリットが持ってたものだ。

そしてこいつは『トーマ・ボルスト』、俺とウルリットとカルメアの三人で討伐したはずの

星啜りの使者だ。」

「私も知っているわ。かつてストラーに生み出され、その野心に惹

かれ妄信していた
質の悪いやつよ。」
王と機械人形は正体を知っているらしい。
「ククク、そうだ、ストラー様の望む世界を作るため、私はそのためにあの方に生み出されたに
違いないなぁ。こうして世界を掌握すればいずれは本物のストラー様が帰ってきて
くれるはずさぁ、ウククククク。」
「そ、それまでは、ぼ、僕が、ス、ストラーとして、せ、世界を……」
少年はどもりながら大臣、いや、トーマの言葉に続く。
「で、四人だけでなんとかなるとでも思ったのか？」
「まさか、さっき自分で言っていたじゃないか、遅すぎたとなぁ。」
その言葉に呼応するかのように外ら悲鳴が上がった。一つだけじゃない。
いくつもいくつも悲鳴が上がった。
「リリィク！」
気が付けばリリィクがバルコニーの方に走っていた。外を確認しに行ったんだろう。
慌てて後を追った。

「これは……っ！」

「ひどすぎます……」

眼下には信じられない光景が広がっていた。瞳に生気のない兵士たちが人々の退路を塞ぎ襲いかかっている光景だ。その兵士たちは魔法を使う者もいれば剣を使う者もいた。

「逃げ場はないなぁ。両国の兵士のほとんどが我が手の内だぁ、ウククククク。

さあ、カルメア、あの二人から先に始末するんだ。」

あまりにも素早かった。気付いた時には俺たちの真上に居た。双剣を根元で合わせ、刀身を削るように外側に向けて斬り払うのが見えた。

「アクセラレート！」

俺は迷わずリリィクを抱き寄せると加速の魔法を使って屋内へと駆け込んだ。

だが、踵の先に何かが触れバランスを崩して左肩を床に擦りつけてしまった。

加速の空気抵抗を防ぐために張った障壁がいくらか衝撃を和らげてはくれたものの、

肩の部分の布地は擦れて無くなってしまった。

「何が……」

起こったかはすぐに分かった。さっきまで立っていた場所が斬り

裂かれていたのだ。
「ほう、音速で飛ばされる粒子をかわすとは魔道砲使いの名も伊達じゃないのだなぁ？」
その言葉に耳を傾ける余裕はなかった。着地したカルメア女王が即座に振り向き
もう一度剣を構えたからだ。
「させるかよ！歪め、歪め！ひたすらに！！ディストーション・ボイスッ！」
女王が斬り払うと同時に王の放った音の嵐が吹き荒れ、放たれた音速の衝撃波を掻き消した。
「ここは俺が何とかする。お前たちは逃げろ！」
「逃げるってどこに！？」
「それに父上は……！？」
王は女王を睨みつけたまま目を逸らさない。後ずさりしたくなるような緊張感が辺りを包んでいる。
「『森の大賢者』の所へ行け。アリスにも緊急事態にはそこへ行くように言ってある。」
「ククク、逃げるのか？ウククク、逃げ切れるかなぁ？まあ、私は手を出さないでいてやろうぞ、
ウククククク。」

「ありがたいお言葉だな。さあ、行けっ！」

「だがっ……」

行くべきではないと思った。

「俺のことなら気にすんな。さっきも見たろう？ちょっとやそっとじゃ死にはしねぇよ。」

俺にも何かできるはずだと思った。

「ストラーの理想を掲げるなら人々を殺すことはしないはずよ。死にかけでも生きていることが
重要だから。今は貴方達が森の大賢者とやらに会うことが重要なのよ。さあ、行きなさい。」

でも……

「霧原、行きましょう……」

リリィクは俺の手を引いた。その手も声も震えていた。
彼女の方が俺よりもずっとここに残りたいはずなのに……
それでも彼女は俺の手を引いて、迷う俺に向かってもう一度言った。

「霧原、行きましょう！」

さっきよりも力強く、まっすぐに俺の目を見て言った。

「……ごめん、行こうか！」

俺はリリィクを抱え上げて走り出した。お姫様抱っこってやつだな。そうでもしないと
彼女はドレスのままでうまく走れないだろうと思ったからだ。

抱え上げた彼女が震えていた。それがとても印象的だった。

「エーテル特異体、難儀なものね。」

「お前も同じようなもんだろ。」

「ふふっ、そうね。」

「さあ、お前たちも行けよ。」

「ええ、そうさせてもらうわ。行きましょう、ソリド。」

「おう……おう……」

「どうかしたのかしら？」

「名前、そう……ハーシュ……ハーシュなのだよ！」

「あら、思い出してくれたのね。」

「それだけ……なのだよ。」

「そう、それじゃあ遊びましょうか？もしかしたら、もう少しぐらい思い出せるかも……」

「……おう、了解なのだよ！」

第三章　研ぎ澄まされた刃の音色　9

「よしっ、着いたぞ！」

何処に着いたかといえばリリィクの部屋である。さすがにリリィクを抱えたままでは走り回れない。いつもの服装に着替えに来たのだ。

「ありがとうございます。すぐに着替えてしまいますね。」

彼女の武器である剣もここに置いてある。ほかに必要な物はもう無いだろう。

しかし、着替え中に部屋に居るのはまずいな。そう思って部屋を出て扉の横に寄りかかって彼女を待つことにした。

「ふう……うおわっ！」

ため息をついた瞬間扉が開き部屋の中に引きずり込まれてしまった。

「霧原！何故外に出るのですか！？」

「いや、だって、女性の着替えを見るわけにはいけない気が……リリィク？」

泣いていた。彼女は泣いていた。

「今は、私を一人にしないでください……」

「リリィク……」

「……今だけでもいいです……そばにいてください、勇人……」

黙ってリリィクを抱きしめた。

何故こんなにも彼女は……そして何故俺はこんなにも彼女に……

「勇人、父上から私の制約のことを聞いていますね。」

俯いたまま彼女が言う。

「ああ、聞いた。詳しくは聞けなかったけど攻撃魔法が使えないとか……」

「その制約を解く鍵は『一番大切な想いを伝えること』と『お互いに迷いがないこと』。

今、勇人にはたくさんの『何故』があるのでしょう？」

俺は黙って頷いた。期待されること、話しかけてくれること、いつも気にかけてくれること、

そして何よりも惹かれてしまうこと。

「その迷いが勇人にあるように、私にもあるのです。そして迷いの中で伝えた想いは刃となって

私の心を引き裂く……そんな無情な制約なのです……」

彼女は顔を上げて俺の瞳を覗き込んで言った。

「ですから、勇人が思い出してくれるまで私は待ちます、この想いを伝えることを……」

ラストダンスの相手を引き受けた時にも聞いた言葉。俺には何か忘れていることがあるんだろうか？大切な何かを……

「もし、一生思い出せなかったら？」

「それでも構いません。私の迷いは貴方に制約を解いた姿を見られることですから……」

「そうか……」

初めて彼女の弱さを見た気がした。橋でソリドと対峙した時にだって命の危険があるにも関わらず毅然とした態度でぶつかっていったのに、今はいずれ国を背負う王の娘じゃない。ただの普通の女の子だ。

「すみません、すぐに着替えてしまいますね。……後ろ、向いていてください。」

すっと俺から離れるとそそくさと着替え始めてしまった。

「おっと！」

あわてて後ろを向く、が、衣擦れの音が聞こえて心臓に悪い。

「勇人、しばらくはここに帰れないような気がします。遠くまで旅

をしなければならないかも
しれません。もし、道中何かあった時は、その判断を貴方に任せても良いでしょうか？」
「期待してる、ってことか？」
「はい、期待していますよ。」
今は、その言葉だけで嬉しかった。
「さあ、行きましょう、勇人！」
「ああ！」
彼女の手を取って走り出す。
ローブの襟元には王から受け取ったスピアラの紋章が小さくも力強く輝いていた。

第三章　研ぎ澄まされた刃の音色　１０

「勇人、私から離れないでください！」

城を出て街の外へ向けて駆けて行く途中、突然のリリィクの大声。
気付いた時には
俺たちの周りを激しい砂嵐が吹き荒れていた。

「防ぎきれるのか？」

「やってみるしかありません。」

リリィクが障壁を張った瞬間、砂嵐は意思を持っているかのように
うねり、
俺たちめがけて襲いかかって来た。

「これは……勇人、どうやら私たちは足止めされているようです。
障壁に軽く触れる
程度で強くぶつかっては来ません。」

「やっぱり簡単には逃げられないか……」

ホイホイと逃げられるとは思っていなかった。しかし、何として
もここを抜けて
森の大賢者の所へ行かなければいけない。

「勇……人……っ！」

リリィクが怯えた声で俺を呼んだ。何事かと彼女の方を見ようとして正面に視線が釘付けになった。

砂嵐の向こう、微かに光が見えた。光は段々と強さを増していく。そして覚えのある感覚がした。収束して、膨張して、でもそれを圧縮して、

さらに強く、力強く禍々しく！

「伏せろっ！」

「はいっ！」

お互い叫んで地面に伏せた。リリィクは正面に障壁を集中させていた。

砂嵐よりも恐ろしいものが来ると分かっていたから。

「来ます、紺碧の魔道砲です！」

想像以上の威力だった。ソリドのジェットブラスターとは違う一本の水流。

それはリリィクが集中させた障壁を飲み込むようにあっさりと突き破り、

遥か後方の建物までもあっという間に貫いていった。

「よう、久しぶりだな、勇人。」

「龍弥……」

近づいてくる足音に身構えるために体を起こす。砂嵐は止んでいた。

「お前が姫様と逃げ出そうとしてるって聞いてな。ちょっとからかいに来てやった。」

「ちょっとじゃ済まないだろう。」

「お前なら大丈夫だと思ってたからな。」

「そうか。」

お互い距離を保って目を合わせる。同じ城に居たのにこうして会うのは二回目だ。

「龍弥、行かなきゃいけないんだ。通してくれないか？」

「……愚問だって分かってるんだろう？」

「そうだよな。だったら……っ！」

不意にプレッシャーを感じて身構えた。

「龍弥様！」

プレッシャーの正体が龍弥と俺の間に舞い降りた。ルビーのような瞳、威圧感のオーラ、
そして大きな違和感。廊下で龍弥と一緒にいたあの女性だ。

「手を出すな。俺の後ろにいろ。」

「……はい……」

龍弥の言葉に従いすっと後ろに下がる。おそらくトーマが龍弥に与えた部下なんだろう。

「さあ勇人、だったら、どうするんだ？」

龍弥はこれ以上手を出すつもりはないらしい。

「……リリィク、魔道書を。」

「勇人、何を……？」

「天を焦がす。」

腕を天に伸ばした。

「わかりました。」

何故だかふっと笑ってリリィクが魔道書の白紙のページを開き、俺の腕に自分の腕を添わせた。

「地を穿ち、天を焦がせ。我が手に宿りしは炎の息吹。紡ぎ出すは火炎の砲弾。」

これを撃つのも三回目か……

「焼き貫け、紅蓮の魔道砲！！」

リリィクと共に詠唱を終了し魔道砲を天に向かって放った。それ

は周囲の闇を眩く照らし
天へと伸びていった。今まで撃った中で一番長い時間続いていた気がした。
やがてゆっくりと小さな軌跡を残し消えていき、周囲にはまた薄暗さが戻った。

「……龍弥、これをお前に向かって撃ちたくはない。」

「ああ、ご遠慮願いたいね。ま、俺は正直元気そうなお前さんたちが見れて満足さ。」

そう言ってあっさりと道を開ける。

「……なあ、彼女は……」

「この世界に居る。そして、彼女のために俺はこっち側に居る。今言えるのはそれだけだ。
さあ、行きな。」

「あ、ああ……」

「さあ、走れ！」

龍弥に急かされリリィクの手を取って走り出した。その先にはまっすぐ外への道が
続いていた。もしかしたら龍弥が道を作っていてくれたのかもしれない。あいつには
自分の選んだ道がある。俺はリリィクとこの道を先に進もう。

民家の数が少なくなり、外壁に近付く。思えば街の外に出るのは守護龍に会いに行って以来か。
こういう状況なら守護龍に会いに行くのも悪くない気がする。きっと力になってくれるはずだ。
それにあの娘のことも気になる。

「勇人。」

考え事をしながら走っていると、後ろから名前を呼ばれた。

「何だ？」

振り向くとリリィクが意地悪そうな笑顔でこっちを見ている。

「はっきりいって『天を焦がす』は格好つけ過ぎです。」

「それで笑ってたのか……」

恥ずかしさと不安と期待が入り混じる中、門を越えた。

一刻も早く森の大賢者とやらに会わなくては。

「勇人、姫様のこと思い出してねえな。」

「龍弥様……」

「今は『様』、付けなくていいぜ。」

「はい……うん、龍弥。」

「いつまでアイツを騙せるかはわからんが、もう少し辛抱してくれ、ナナ。」

守人の目覚め

……

まただ、また眠りに落ちていた

いつになれば私は元に戻る？

いつになれば記憶が戻る？

記憶の手掛かりが少しでもあるのなら

誰でもいい

その記憶を覗かせてくれ

……

霧原勇人

そうか無事にこの世界へ

紅蓮の姫君が頑なに隠す記憶の秘密

その手掛かりも

この森に来るのなら覗かせてもらおうか

だが、その前に確かめることがある

目覚める度に居るこの場所

意識を失って目覚めたときには

間違いなくこの場所に居る

誰かが私を見ているのか？

その正体、必ず突き止めてやる

それまで眠りの時が来ない事を祈ろう……

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9520m/

魔道砲と紅蓮の姫君

2011年11月7日10時05分発行